

thai-lao 印象記

February 2007

Takuji MAEKAWA

タイ・ラオス満喫ツアー予定表

日	曜	都市	移動時間	予定	宿
13	火	大阪→バンコク	AIR 14:20→18:45	ホテル→ぶらぶら	デイビス
14	水	バンコク		市内観光	デイビス
15	木	バンコク→ビエンチャン	AIR 午後(時間未定)	ホテル→ぶらぶら	ランサンホテル
16	金	ビエンチャン		市内観光	ランサンホテル
17	土	ビエンチャン→バンビエン	BUS 午前(時間未定)	ホテル→ぶらぶら	エレファントクロッシング
18	日	バンビエン		市内観光	エレファントクロッシング
19	月	バンビエン→ルアンパバン	BUS 10:00→17:00	ホテル→ぶらぶら	ヴァイコッチチアン
20	火	ルアンパバン		市内観光	ヴァイコッチチアン
21	水	ルアンパバン→シェンクワン	AIR 16:35→17:05	ホテル→ぶらぶら	ワンサナホテル
22	木	シェンクワン		市内観光	ワンサナホテル
23	金	シェンクワン→ビエンチャン	AIR 17:35→18:35	ホテル→ぶらぶら	チャンタパンヤホテル
24	土	ビエンチャン→アユタヤ	TRAIN 19:05→05:44		車内泊
25	日	アユタヤ		市内観光	未定
26	月	アユタヤ→バンコク→大阪	TRAIN 10:48→12:20		機中泊
27	火	大阪	AIR 23:00→06:10		

10:00 JR最寄り駅を駅快速列車にて出発

11:20 新阪急ホテル→関空行きバス発

12:10 関空着
出国手続き

14:20 JL727便にて関空を発つ

18:45 BNGKOK国際空港着

出国手続きの後、Baggage をカートに乗せ、BANGKOK→LaoVIENTIANE への移動のためのチケットを取得するため、Lao Air の営業所事務所を探す。空港内 Information にて聞くも、聞き取りにくい英語発音。

やっと、道路を隔てたビル内2階にあるとのが判明。空調の効いた空港建物から出た途端、激しい熱い空気にさらされる。

Lao Air 事務所が入居するビル前にて待機（その間、同行家族が事務所に向かう）。時間外とのことで事務所は closed。再び空港建物に戻り、建物内ツアーリスト agent (TOUR SERVICE) と折衝する。電話を入れた模様であるが、closed（あたりまえのこと、事前に事務所まで足を運んで、確認済）。空港近くであっても、歩道、段差など全く未整備。カートでの移動に苦労。

明日、BANGKOK 市内で購入することとして、TAXI にて市内ホテルへ。メーター付き TAXI。AIRPORT TAXI TICKET で50Bの SERVICE CHARGE が必要。高速料金は客が現金支払い。

21:10 HOTEL(DAVIS)着。タイ在住家族と合流（相当時間待った模様）。チェックイン。デポジット300ドル。部屋チェンジ。

21:15 徒歩にてタイ在住家族の案内でチャイニーズレストランへ。空調の室内でリーズナブルな価格で食事。シーフード。

夜店の屋台を見ながら、徒歩にてホテルへ帰る。



空港島を左に見て成層圏へ



大陸上空に入り空気感が異なる



眼下に大陸が覗ける。空気感は一層透明感に欠ける。暑熱を感じさせる



中国系タイ人経営のシーフードを売り物にしたレストラン（食堂）。部屋の外にもテーブルがあり、食材が泳ぐ水槽。日本のものより格段に巨大なシャコの塩焼きが美味。店内には家族連れが多数。ファミリーレストランの様な店。リーズナブルに美味しいものが食せる性格の店づくり。祐治がタイ語をあやつり元気な様子。

頭上に薄型大型テレビが設置されており、人気の連続ドラマの放映でみんなの目がこちらに。ツーリストは当方のみ。





食事の後、ホテルへの帰途。屋台の若者と交流。昆虫の焼いたものや揚げたものあり。蛹を食したがなかなかのもの。さしたる味がなかった。ガソリンスタンド。コンビニなどがあり、広い道路から少し入った一角。若者の救急ボランティアのバイクなどでにぎわっている。この時間帯でもにぎわいあり。



早くも野良犬登場。性質は穏やかな犬がほとんど。タイモラオスも。



HOTEL DAVIS
なかなかの格式のホテル。
深夜のロビーにて。



Skin Care
 Dr. P. P. P. P.
 Dr. P. P. P. P.
 Dr. P. P. P. P.

Dentistry
 Dr. P. P. P. P.
 Dr. P. P. P. P.

Special Promotions
 with Whitening by Laser SMILE ONLY 10,000 Bt
 10% DISCOUNT on dentistry with Laser
 50% DISCOUNT on all dental services
 Welcome for Free Consultation

Sathorn VILLA
 0-2212-7090
 www.sathorn-villa.com

Service Apartment

20,000 Bht/mth.

Trendy Salon
 Product by JH/FEDD

Hair Treatment
Sale 40% off

Shampoo/Blow-Dry: 1,000 - 2,000
 Hair Cut: 500 - 600
 Hair Color: 1,000 - 3,000
 Permanent Color: 1,000 - 2,000
 Straight Perm: 1,000 - 2,000
 Hair Treatment: 500 - 1,000
 Hair Styling: 2,000 - 3,000

Open Daily 9:00 am - 22:00 pm.

Phrom Phising
 02-645-6432

Sala Daring
 02-632-6667

frangul living in the heart of Bangkok

Pantip Court Executive Residence
 38 South Sathorn Road
 Soi 1 Road
 Bangkok 10120
 Thailand
 Tel: 662-285-0222
 Fax: 662-285-0223
 www.pantipcourt.com
 enquiry@pantipcourt.com

Face Bangkok
 #29 Soi 38, Sukhumvit Road
 Tel. 662-2-713 6048
 Restaurants - Bar
 Spa - Patisserie



PRET Suburban (ES) BTS Phrompong

SPA 24*

Thai Herbal Bath Massage
 Oil Herbal Bath Massage
 Body Oil Massage (Aromat)
 Head Massage
 Foot Massage
 Steam Saunas

MY SPA

Special Promotion for Couple
 Defrosting Program 3 hrs 4,999 only 3,500 for 2 person
 Spa and Massage

Happy Valentine's Day

Face Bangkok
 #29 Soi 38, Sukhumvit Road
 Tel. 662-2-713 6048
 Restaurants - Bar
 Spa - Patisserie

BTS SKYTRAIN SERVICE HOURS
 06:00 - 24:00 hrs
 06:00 - 24:00

BTS Hotline Number
 02-617-5000

- 8:00 breakfast ホテルにて european breakfast。日本食風の朝がゆがある。これにフライドした豚のミンチ（トムヤムクン風の味付け）をトッピングして食する。これは thai lao とも、よく出された。帰国する J L 機の機内食としても供された。
Emporium(高級デパート)内のツーリストで VIENTIANE への Air チケットを入手すべく、Phrom Phong(プロンポン)までツクツクで移動。徒歩で約 20 分のところ。Sukhumvit(スクンヴィット通り・バンコクの目抜き通り)近く。
- 9:30 プロンポンに着くも、カメラ用メモリーチップを忘れたことに気づき、タクシーにてホテルに一旦、帰る。
- 10:00 再度、プロンポン。エンポリウムが開店するのを待って、ツーリストへ。結局、LaoAir のチケットは入手できず、タイ航空のチケットを入手。
BTS (高架を走る電車) で Asok (アソーク) へ移動。
- 12:30 アソーク駅着。高架から降りて、昼食を採る。スクンビット通りから少し入った「スクンビットハウス No. 1」でタイ料理の昼食。客は他にひと組のみ。
アソーク駅から MTR で HuaLamphong(ファランボーン駅、バンコク中央駅)に行き、HONG KHAI→AYUTTHAYA の夜行寝台のチケットを手に入れることとする。
- 13:30 ファランボーン駅着。二人用コンパートメント、クーラー付きをゲット。
駅前の裏町を散策。駅 2 階でコーヒーを飲みながらマンウォッチング。コーヒーショップ店名はブラックキャニオン。コーヒーの概念とは異なるもの。
- 15:20 ワットプラケオと王宮見学 (Wat Prakaew Grand Palace)
(ファランボーン駅からタクシー、交通渋滞あり 4 時の閉館に間近か)
- 16:40 ワットポー見学 (Wat Po)
- 17:30 ナイトマーケット (スワンルムナイトバザール) を歩き、両替などしながら、バンコク在住家族と待ち合わせ。彼は会社の乗用車で駐車場に到着。
観覧車近くのチャイニーズレストランで夕食。ホテルまで彼の車で移動。
- 21:30 State Tower ビル 6 2 階屋上 (Dome) でビールと夜景を楽しむ。
- 23:30 ホテル着



ホテルの窓からもWatの風景



高級ブランドショップの Emporium デパートの玄関にも仏教施設が。50歳がらみのおばさんがお供え物を。興味深く見ていると、ひとつ如何。バナナの葉にくるまれた「おはぎ」様の甘いもの。



小さな人形の様なものがピッシリ並べられている。よく見るときらびやかな色彩の右のようなもの。





かなり高めの一軒家レストラン。チーク材の元貴族屋敷。床のブラウン、外壁の純白。タイ料理の香草には少々なじめず。



庭の佇まい。このような店にも祭壇が



バンコク中央駅。終着駅。ドーム型屋根。2週間後再びこの駅に降り立つ。



待合室風景。広場の両側に1, 2階に各種施設。便利にできている。



道路を隔てた駅前に個人商店が立て込んでいる。狭い通路の両側に食べ物・雑貨あらゆるものが。臭気に満ちた空間。いち時期の上野アメヨコを臭くしたものの。この臭気には辟易。

Wat Prakaew Grand Palace ワットプラケオ・王宮



ワットプラケオは1782年、ラーマー世がバンコクに遷都し、王宮が建設され、同時に王朝の守護寺、護国寺としてこのワットの建設が始められたという。基礎の部分にはビルマ軍に破壊されたアユタヤの遺跡を崩して取り出されたレンガが使われているとのこと。全ての建築物は常に修復作業が行われ、新築のように光輝いている。本堂にはエメラルド色の仏像（実物はヒスイ）を祀っていることからエメラルド寺院と称されている。

特異な建築デザインと色使い、燦然と輝くガラスモザイクの外装、金色に光る仏塔、それらを取り巻き、猿、鳥、獅子、蛇などの動物をモチーフにした彫像が配置されている。それぞれに特別の意味が含まれるものであろうが、我々にはわからない。イマジネーション豊かに具現化された守り神か？異様な異文化空間であり、足を踏み入れた最初はその異様さに圧倒されるが、しばらくこの空間に身を置くにつれ、燦然たる外壁もケバケバしさだけではない、嫌みのない静けさが感じられるのは何故か。高い文化的到達度を示すものか。





ワットプラケオは周囲を屋根付きの回廊で囲まれており、回廊の内壁にはインドの叙事詩「ラーマーヤナ」をタイ風に翻案した「ラーマキエン」が描かれている。絵柄を順に追っていくと何となく物語のストーリーになっている感じ。若者の男女により、今日も修復が行われている。エキゾチックだが、さして違和感のない質の高いものである。この壁画に触れていると、一層にワット全体に違和感無く、浸れるから不思議だ。

↑ 長い回廊



←男女の若者による修復作業

↓ アンコールワットのミニチュア



何故か、境内にアンコールワットが。19世紀末、当時シャム国の属国であったクメール国の大寺院に感動したラーマ4世が作らせたものとのこと。

傷みの激しい本物よりも、美しいのではないかと いわれるほど精巧。カンボジア探訪も兼ねている。



王宮のドウシット・マハ・プラサート宮殿

正十字型の寺院風の本体の上に複雑な7層構造の屋根。
この宮殿では王族の葬儀などの儀式に使われるという。タイ風の美しい建物。



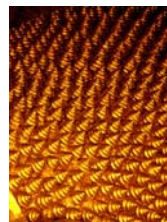
← チャクリー・マハ・プラサート宮殿

設計はイタリア人建築技師。3階までは大理石を用いたビクトリア様式。重層の屋根から尖塔に至るタイの伝統的建築様式と融合。

完成は1882年。正面からは、迫力十分。よくマッチしている。

ワット・ポー (Wat Pho)

大寝釈迦仏とタイ式マッサージの総本山として知られる王宮寺院。全長46㍓、高さ15㍓という巨大さ。レンガで形どり、漆喰で造形されたという。ただただ、唾然として、圧倒されるのみ。



← 巨大な扁平の足の裏。バラモン教による宇宙観が螺鈿細工画によって表現されているという。扁平足の足裏はその人が超人であることを示す32の身体的特徴の一つとされているとのこと。



← 賽銭として供えられたコインを108の壺に投入することによって願をかなえる。 →



チャイニーズレストラン（スワンルムナイトバザール）と State Tower 62F ↓



- 9:30 Breakfast 前日と同様。European style breakfast。
- 12:00 DAVIS をチェックアウト。荷物を預けて、本日の行動へ。
- 12:00 昨日のプロンボンまで徒歩で行く。途中、食事のとれる野外テントの屋台に入る。
20Bの麺と10Bペプシを注文。麺は米粉のもの、ビーフのかけつゆ。例の香草(セロリ系)の匂いが鼻を突く。それ以外はなかなかの味。近隣の工事現場の労務者などで賑わっている。同席の現地住民が親切。金物類を売っている屋台で鍵を購入。
さらに、徒歩にてBTS プロンボン駅まで。途中、蜂蜜・蜂の巣売りを見学。暑さに閉口。
- 12:50 とりあえず、少し冷をとるため、エンポリウムデパートに入り一階のカフェでアイスコーヒー。このコーヒーはまともなもの。
BTS にてプロンボンからサナム・キーラー・ヘン・チャートへ。BTS プロンボン駅にてココナッツの飲み物を買ひ、手に持って改札へ。液体飲み物を没収される。厳しい警備。スタジアムも近くにある。
MBK ビル(5階の建物・上質なショッピングセンター)、隣接してTOKYU デパートもあり。
旅行者で賑わっている。特に目的もなく、ショップを見て回る。個人商店が狭いブースにテナントとして入っている。無数のショップ。無数の商品アイテム。
1階のインターネットカフェでエスプレッソにて休憩。
- 16:30 再びBTS でプロンボンまで帰りホテル着。
- 17:20 BANGKOK 国際空港着
猛スピードで高速を飛ばすタクシー運転手。ホテルから約30分で到着。
出国手続きの後、Boding Time 18:40 TG 692便。
- 20:30 Vientiane International Airport 着。
乗客は約60人。ほとんどが欧米人ツアーリスト。彼らはビザが必要。日本人は不要。
混み合っているためか、Diplomatic Official Immigration と書かれたブースへ誘導され入国手続き。SSEAN 会議の時の掲示がそのまま残されているのか?
ランサーンホテルの出迎えがない。出会ったサチの知り合い(旅行社)が電話してくれた模様。今から行くとのこと。21:30頃、ホテルのバンで出迎えが現れた。
- 22:00 ランサーンホテル(LANEXANG)にチェックイン。メコン河に面したヨーロッパ風の格式のホテル。
ジュニアスイート。2部屋。ともにテレビ、クーラー付き。5000円未満。
- 22:30 徒歩にて、近くのレストラン「コートダジュール」に着き、遅い夕食。
客は3組程度。2階からフランス人風欧米人が退店。他もラテン系欧米人の風情。
シーフードパスタ。フィレのステーキ、ラオビアを注文。レアに近いミディアム。
ラストオーダーは何時?特に無い。お客さん次第と悠然たるもの。しかし、従業員は早く終わりたい様子。外ではパトカーらしい音。従業員はみんな店を出て見に行く。
- 23:30 退店。徒歩にて、ホテルへ。同行の家族はビエンチャンの自宅へ帰り泊。ホテル門衛に送られたとのこと。

街角の蜂蜜・蜂の巣売り。採集したもの



Bangkok 国際空港への高速道路





← BANGKOK 国際空港
VIENTIANE へ →
中華正月の飾り付け



夜の VIENTIANE 空港。
搭乗機は最終便。寂しい情景。
空港は日本の援助。維持管理のために日本
からの職員が常駐とのこと。



←LANEXANG HOTEL
フロント・カウンター



ホテルからレストランへの途中。メコン河に沿った道路沿いに宗教施設。
ホテル隣接 ↓



←レストラン「コートダジュール」
ラオスで南フランス。壁には南フランスの
風景画 ↓



- 9 : 0 0 European breakfast
1階ホールにてビュッフェ形式の朝食。寿司、とんかつなどの日本食もあり。
- 11 : 0 0 ホテルの斡旋でタクシーを借り切りにして市内を廻ることに決定。6時間、24ドル。
少し、英語のわかる(単語程度)気のいい運転手がトヨタカローラで迎えに来る。
タート・ルアン (That Luang)、マーケットのターラートトンカンカン (Talat Tongkhankham)、ラオス人民軍歴史博物館 (Lao People's Army History Museum)、ラオス繊維博物館 (Lao Textile Museum) の順に廻ることに決定。
途中、一度ダウンタウンに戻り、フルーツとフルーツジュースで休憩。隣接のショップで後に購入することとなる壁掛けを発見。
- 17 : 3 0 LANEXANG HOTEL に一旦帰着。
シャワーの後、メコンの落日を見て、ツクツクにて夕食のレストランに移動。
- 18 : 3 0 レストラン (KUA LAO) ラオス料理を中心とした店。ただし欧米人向けの料理を提供することで評判の店。
食事を共にする山田氏、Jumping Tour の内藤さんを待つ。
Springroll sausage たけのこスープ、Lap シュリンプ、赤米飯を注文。35ドル。
- 21 : 3 0 2次会に徒歩で行く。Bar Jazzy ジャズを聴かせる都会的な Bar。
バーボンのダブルオンザロックスなどを飲む。24.5ドル。徒歩にて帰る。
- 23 : 0 0 ホテルに帰着。

タートルアン (That Luang)



巨大なゲート建造物をくぐって仏塔へ



広大な広場の風景



← 鳥を放って願いを叶えるのが風習。
鳥を売る人達。ラオス各地の仏教施設でこの風景が見られることとなる。



巨大な仏塔が背後に



仏塔の正面に当時の王の象が

タートルアンは高さ45mの黄金の仏塔。ラオス全土のシンボル。ラオス人なら一度はお参りしたいといわれる。その起源は一節には紀元前3世紀に、クメール様式の仏塔が建設されたといわれるが不明。当時の王がルアンプラバンからピエンチャンに遷都した16世紀半ばに建設を始めたことが記録に残っているといわれる。その後、1873年に中国からの侵攻で破壊され、1930年に入って修復され、現在の姿になったといわれる。大仏塔を無数の小仏塔が二重に取り囲む配置になっている。黄金に輝く塔は乾季の強い陽光にまばゆいが、構造はシンプルで華美な装飾の無い素朴な仏教施設との印象が強い。タイのこの種の施設とは対比的である。毎年のタートルアン祭りには全国の僧侶が集まり、寝泊まりすると言う。先の写真の広大が広場が市民で埋まると言う。一種の巡礼の地になっているようだ。



← 仏塔は回廊が周囲をとり囲んでいる。その間は美しい芝生。回廊内は破壊された仏像（仏教遺跡）などが置かれている。タートルアン祭りには僧侶の宿泊場所になるという。回廊の2辺の壁は壁画どころか、ラオスの画家（素人）の油絵が掛けられ、何故か、販売されている。回廊の屋根越しに見える建物は隣接の別のワットのもの。



↑ お供えのローソク・線香を
売るおじさん





←回廊に安置された破壊された仏像。お参りの市民が金箔様のものを張り付けてお祈りする。



← これから訪ねる地方を描いたもの。回廊に展示されているもの →



タートルアンに隣接するワットを覗いてみると、一変して極彩色の本堂に目を奪われる。宿坊の僧の動き、客待ちするツクツクもけだるい真昼。タートルアンも12時には閉鎖して2時まで昼寝時間に入る。



タラートトンカンカン (Talat Tongkhankham)

ラオスには日本のスーパーマーケットのような日常消費物資の供給施設は無い。すべてタラートと呼ばれる公設民営的な(場所によって異なる。民営建物にテナントとして入る場合もある・・・中国系に多い・・・)ようだ。タラートは夫々に特質がある。ここは、鮮魚、果物、花卉、穀物、牛・豚・鶏・の食肉、加工食品、など生鮮食料品を中心とした庶民の市場としての性格。しかし、日曜雑貨あらゆるものが売られている。中では食事もできる。市民生活が垣間見える場所。ここにはツーリストの姿は無い。



↑タートルアンで見た仏事の花等の花卉↑



ココナッツミルクを搾る。搾りカス。



市場内風景



豊富なトロピカルフルーツ。美味なものあり。



↑乾燥フルーツ



←生鮮野菜も極めて豊富。
暑熱と乾燥の中、時折、水をかけて鮮度保持。

夫々の食材種類毎に売り場が区分されている。食肉売り場はシャッターを押すのが躊躇された。

生肉、加工品、ローストされたものなど、アイテム、量とも豊富である。鮮魚(全てナマズ、ウナギ、コイ、テラピア、サワガニ様のいきもの、カエル、日本で言う外来のサクラ貝の様なタニシなどの淡水魚)売り場には水槽で生体で売られているものもあり、焼き魚にしているものもあり、これまた、品目、量とも豊富である。生鮮食品は全て量り売り。

タマゴの価格は信じがたい。あふれる商品、床は土のまま、デコボコの狭い通路を行き交う商品を満載した荷車。午後4時頃からは、買い物客でごった返し、活気に満ちている。

市場周辺には衣類、電機製品、携帯電話、パッチモンの時計、仏器などの店が集積しており、一大集客施設になっている。

生鮮食材について言えば、これほどの物資を供給する商品生産農業が近郊で展開されているとは考え難い。

そのほとんどが、後日通過することとなる、国境・友好橋を通過して、タイから流入したものと考えられる。

雑貨、菓子・スナック類は殆どがタイか中国、ベトナムがそれを追って進出を図っている模様。

コメは袋に入ったものがタイ米、ラオス米は大きなカゴに満載してバラでうられている。特徴は赤米が大量に売られていること。穀物生産は一部商品化されていることがわかる。

ラオス人民軍歴史博物館 (Lao People's Army History Museum)



ラオスは1975年の人民民主主義共和国成立以来、ラオス人民革命党による一党独裁体制が続いているまぎれもない社会主義国である。

ソ連、ベトナムの改革の流れを受けて、1986年以来、市場経済化を柱とした開放政策が進められている。政・経矛盾する体制の中で、思想的な引き締めが必要なのか、近年、こうした人民軍歴史博物館や後日、見ることになるカイソーン博物館などの威圧的な建物の建設が見られる。国家のよって立つ基盤を誇示するためか？

しかし、殆どラオス人の見学者の姿は見られない。(入館中、皆無であった。ツーリストの姿もない)。国民の関心事はこのことには無い・・・と言わんばかりである。

軍人の門衛に入館チケットを点検される。広大な敷地には、社会主義国特有の労働者・農民・人民軍兵士の巨大な像、帝国主義者に向かって進軍する勇猛な人民軍兵士の像が飾られ(例によって、いささか芸術性に欠ける像)、ベトナム戦争時代に使用したソ連製のヘリコプターや軍用機、砲、戦車が展示されている。それを見ながら高い階段の上に建つ威圧的な建物に入ることになる。

館内は写真撮影厳禁。

展示内容は1階にはベトナム戦争時代に使用されたソ連製の軍用車両や砲が展示されている。実戦で使用されたものである。中には、小火器で被弾したと思われる軍用トラックもあり、生々しい。

2階に上がると、ラオス中世から今日までの軍事的史実を絵、写真、武器などで時系列的に展示されている。ラオスの歴史は不連続なものと言われる。紀元前から立ち替わり、入れ替わる移住民族の歴史である。

これには、絶えず侵略、侵入という軍事行動が伴ったものと考えられる。歴史が明らかになるのは中世以降ではないか、それまでは文字記録がないので、わからないのが実態のようだ・・・

ランサン王国の建国と外的との戦い、属国とされたタイへの抵抗などが展示されている(その時代のことのように)これを評価しながらこの上に立って現在の人民軍につながり、植民地支配や封建制を打破してP. D. R. 建国に至ることを、国民結束の共通認識にしようとするのがうかがえる。

とって付けたようで意図的なカモフラージュのように見えて、何かおかしい!

今日のラオスがあるのは、何ととっても、1950年代のインドシナ戦争、60年代のベトナム戦争時代のいわゆる内戦、1975年のP.D.R.建国までの苦難の歴史が中心である。これなくして今日のラオスは語れない。

さすがに、この時代の展示が充実しており、多数の写真、(司令部の作戦会議、敵の残虐行為、戦闘場面などの写真が多数)使用武器が保存展示されている。明確な司令部の存在、指導者の存在、北ベトナム人民軍との協力などがパテトラオの時代から充実した展示になっている。フランスの植民地支配に抵抗した liberation で使われた弓矢や落とし穴の時代から写真や実物で展示してある。

ラオス内戦（ベトナム戦争）当時、頻繁に聞いた地名も説明書きに出てくるのは、何故か懐かしい気分である。戦場で使用された通信機器や情報収集用ラジオが Panasonic 製であるのも、何か物悲しい。説明には英文が添えられているが、稚拙な英文。だから、我々にも解読可能。辞書要らず。

French colonialist American imperialist の記述は印象的。日本の占領時代（終戦までの約1年間）のことには、触れられていない。

しかし、Hmong 族のことについては、ただ一か所の写真に「Hmong の兵士と戦った」と簡単な記述があるだけであった。Hmong の悲劇なくして、今日のラオスはない。

部族間対立（実際は部族間対立・抗争ではない。フランス、アメリカが利用しただけ、犠牲者である）を蒸し返すのは、多部族の統一のもとに国を統治していく上で、このことを語ることはタブーになっているのか？

入館者の記帳ノートに下記のように記載した。

This museum's display is very interesting. But I hope more descriptions about Hmong soldiers' tragedy.

Peace Forever. From Kobe Japan あえて氏名は記載なし。この程度の英語力で解読できる説明英文。

【Hmong の悲劇・モン族の悲劇】

ベトナムの抵抗に手を焼いていたフランスは、自らは血を流すことなく、部族間のわだかまりを巧みに利用して、現地人同士を戦わせる方策で植民地支配を維持しようとした。

そのため、ラオス、ベトナムのモン族から約2万人（と言われている）をサイゴン南の訓練キャンプに送り続け、彼らを対ベトナム・リベラシオンの戦闘集団として結成し、戦費調達のためのラオスのアヘンを本国に送る任務やフランス軍兵士の救出などにあたらせた。ラオスの村々の共産化（解放）を狙うベトナムと衝突することとなる。

ディエンビエンフーが陥落すると、アメリカはインドシナの共産化を恐れ、生き残りモン兵士をひきつぐことにし、モン特殊攻撃部隊を編成して白人の身代わり部隊として過酷な戦闘に参加させることとなる。

この部隊と北ベトナム軍、パテトラオとの交戦が激しくなるにつれ、モン死者は増加の一方。これらはアメリカによって「モン狩り」の手法でモン族の村々から徴発されたモン族の青年である。

サイゴンが陥落するとアメリカへの引き上げ機に乗れなかったモン兵士（数万と言われる）は過酷な運命を迎える。その後、ベトナムとラオスの軍事協定が締結され、大規模なモン兵士掃討作戦が展開されることとなる。

いまもってルアンブラバン方面などの山中に相当数の元モン兵士・家族が生き延びていると言われ、いまだに掃討作戦が行われているとのこと。

この国もへたをすると、カンボジアのポル・ポトの轍を踏んでいたかも。

人道上からも批判を受け、ラオス政府は掃討作戦があったことを、やっと、認めたと言う。

一方、当時のアメリカへの Hmong 亡命者も多数にのぼる。これらの息子・娘が20歳を超える。

（vientiane times の記事にその一例が掲載されていた）

ラオス繊維博物館 (Lao Textile Museum)



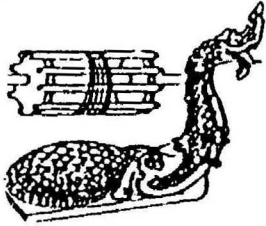
レストランKUALAO Bar Jazzy



MEKONGに落ちる夕陽



MEKONG の夕暮れ時、市民が川岸のショップでビールを楽しむ



Lao Textile Museum

(Note on the background of the Museum. Excerpts from the speech of Mr. Hansana Sisane addressed at the official opening ceremony)

The Lao Textile Museum is the realisation of Hansana Sisane family's dream. Although not all together complete, it is a place where visitors can study and appreciate another aspect of rare cultural heritage of Laos expressed in silk fabrics- their texture, colours, and motifs- woven mainly by Lao women since antiquity. Other cultural heritages of Laos that are recognised as World Heritage are ancient Luang Prabang town and the Vat Phou ruins in southern Laos.

Hansana Sisane, who is the director of the Lao Textile Museum, said: Some years back, there were foreign antique collectors/hunters, who came to the country to seek for and buy antique silk items, particularly silk fabrics of Samneua, Xiengkhouang origin, and Yao motifs and patterns of Oudomxay. Bags upon bags of ancient masterpieces were taken out of Laos.

He said he heard elders telling younger people that antique items are precious artifacts that bring good luck and happiness to dwellers of the house, and perhaps more important is that they are reminders of one's ancestors, the bridge that takes us closer to our forefathers and foremothers. His great grand mother said: Look at these antique items, and you will see faces of your ancestors. That prompted Hansana and his family, which at the time was engaging in handicraft business, to collect as many antique fabrics as possible. Some date back hundreds of years. Such is this family's private quest to save at least some of antique fabrics of Laos.

In this endeavour, the family has been fortunate to have sympathetic and supportive friends who also see meanings of Hansana's pursuit. Among them, he sites his own father, who was a versatile public figure- politician, poet, music composer, musician... Mr. Sisana Sisane was for many years minister of information and culture. He acknowledged supports and encouragement from Mr. Sileua Bounkham, and Mr. Phandouangchith Vongsa, respectively former and current minister of information and culture. Hansana appreciated Mr. Ananda Pasaxay's knowledge and useful advice.

Among foreign friends of the family, Hansana mentioned priceless support and friendship of Linda Schneider, Susumu Ushida, Noriko Abe, Aya Koizumi, Isao Nakauchi, Prof. Yoshiaki Ueda...

On his future project, Mr. Hansana hoped to build one more Lao house which can be a centre for training of younger generation to get to know their tradition and culture. A place of learning how to weave, to sing, play instruments and dance...

Nevertheless, he said that the present museum has procured hundreds of antique silk items of famous Houaphan, Xiengkhouang, Luang Prabang, Vientiane, and Attopeu origins. He said together with those antique items kept by private individuals, perhaps these silk fabrics may serve as "documents" for researchers to understand more about their creators, their lives and society of the past time.

KANCHANA The Beauty of Lao Silk

LAO TEXTILE MUSEUM



President : KANCHANA The Beauty of Lao Silk
LAO TEXTILE MUSEUM
MR. Hansana SISANE

Owner : LAO TEXTILE MUSEUM
Ms. Bouavanh PHOUMINI

Owner : KANCHANA The Beauty-of Lao Silk
Mrs. Bouansonkham SISANE

Show Room : 140 Samsenthai Rd, Thatdam Square
P.O Box 9821 Vientiane, Lao P.D.R
Tel & Fax (856-21) 213 467
E-mail : kanchana_tbls@hotmail.com

LAO TEXTILE MUSEUM visit by appointment
<http://www.ibiss.co.jp/laomuseum/acces.htm/>

The art of weaving has been practised by different ethnic groups in Southeast Asia for thousands of years. Scholars, fabric collectors and archaeologists who have studied the region's antique fabrics dating back several hundred years concluded that woven silk products are indeed mankind's heritage.

Laos, or the Kingdom of Lan Xang, as it was known in ancient times has traversed a long historical path. Many historians believe that the ethnic group called Lao, or those who speak the Tai-Lao language, were originally from Sechuan, China. Legend claims it was here that silk thread originated some 4,500 years ago. Not long ago, Chinese archaeologists found in Sechuan important evidence about silk fabrics based on silk used to wrap a mummy, believed to be the wife of a Tai chieftain. This fine piece of cloth, with coloured patterns, proves that the Lao people whose forebears spoke the Lao-Tai language thousands of years ago knew the art of weaving beautiful silk and had the knowledge of using leaves and tree barks for dyeing purpose. Experts in natural dyes claim that some 300 plant varieties have been used by humans for making almost 80 different colours.



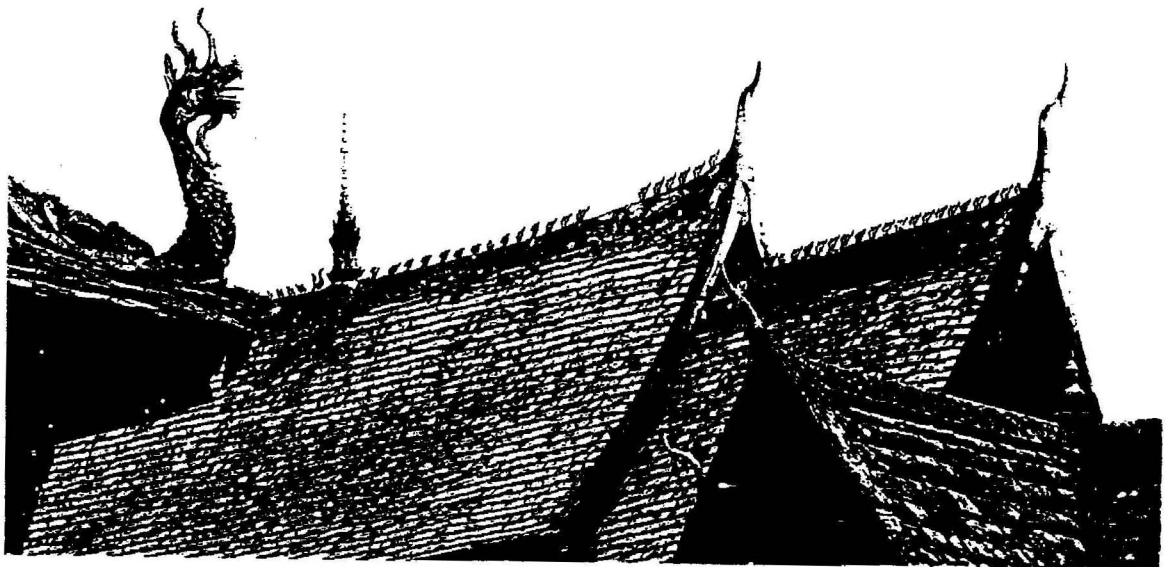
The art of silk weaving that depicts the identity of the makers and demonstrates the knowledge in applying natural colours is still much in evidence in Laos today. Even though weaving techniques and processes in making dyes from plants as practised by different ethnic groups in Southeast Asia are very similar, experts in weaving techniques point out that the method of weaving and dye application used by Lao people are unusually sophisticated, especially the so-called “*chok*” technique of the Lao Phuan and Tai-Daeng, the majority of whom live in Laos’ northern provinces of Xiengkhuang and Huaphanh. What is extraordinary about the “*chok*” technique is the way figures and colours are introduced onto fabrics as their creators weave, according to their fancies. It can be likened to the way painters use a paintbrush on canvas; and these coloured figurines and patterns stand out in relief, just like brush strokes on oil paintings. The difference here is that silk threads, instead of paint, are used to express the artists’ imaginations.

Another phenomenon about Lao silk fabrics is figurines, namely the king snakes known as *nagas* and the king of frogs that one often sees on the cloth. Lao people or those who speak Lao-Tai language believe that their ancestors were *nagas*. Lao people and Lao-Tai language groups have a long tradition of rice farming. They depend on water for planting rice. They believe that *nagas* create the rain needed every year for a good harvest. There are years when the rains are insufficient. In such a situation, people believe that the king frog can communicate with the *Phaya Thaen* (heavenly being) so as to bring more rain. What they ask for is prosperity; and this message may be woven into silk pieces if you choose to examine them.

Silk weaving and the use of dyes made from plants are not rare in today's Laos, however current trends are a cause for concern. Business competition or the market-oriented economy of the present drives many weavers and natural dye makers to the use of



artificial silk threads and dyes. They may even use machines for weaving so as to turn out more products at a faster rate, with lower production costs, to meet their customers and tourists' demands. The weaving tradition that has been developed over thousands of years is now being overlooked and neglected and may eventually become extinct. This would be a sad and huge loss for mankind.

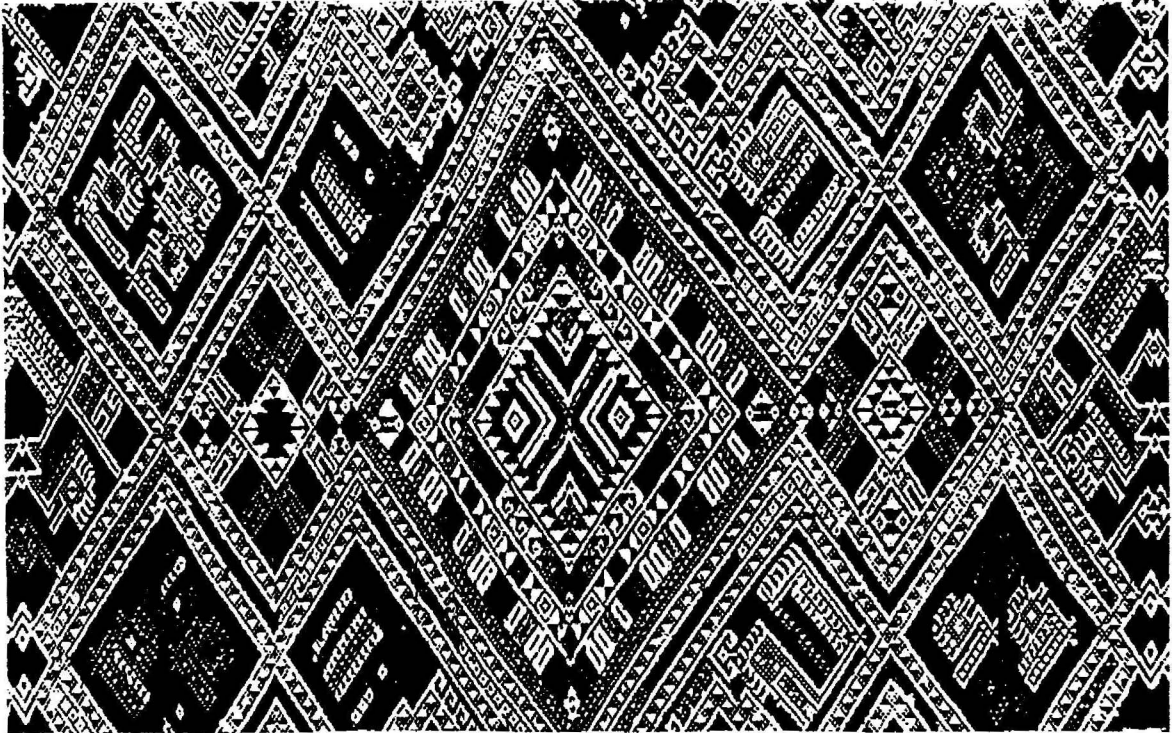


Kanchana's The Beauty of Lao Silk is an undertaking that uses traditional weaving techniques and natural dyes handed down through generations of families. Kanchana's products are made according to time-honoured Lao traditions, starting with the selection of indigenous silk threads of high quality, which are then dyed with natural colours and designed using Kanchana's special identity and impeccable craftsmanship. Each silk piece takes more than a month to complete. The products of Kanchana's The Beauty of Lao Silk have been referred to as works of art in silk.

Kanchana creates a variety of products, including shawls and scarves that at one time were only used in religious ceremonies. But these days, they can be used to tastefully decorate the home as well. Kanchana is committed to doing its best in its business undertaking and at the same time preserving the country's heritage.

Kanchana's clientele are successful local businesspeople, foreign business men and women, as well as collectors and tourists. In addition, customers include top political figures, guests of the Government, queens number-one ladies foreign ministers and other important figures.

Kanchana's The Beauty of Lao Silk has participated in several silk fabric exhibitions in Japan as well as in Italy, France and many Asian countries. In 1999, Kanchana was awarded a German prize



Kanchana has also been able to materialize an important dream - the creation of a private museum of silk fabrics, the first private museum in the country, known as the **Lao Textile Museum**. It has quite a large collection of antique silk fabrics of various ethnic groups in the country, despite the fact that almost all antique silk pieces were bought up by foreign collectors.



The museum was officially opened in 2003. It has more than 1,000 pieces of silk fabrics aged between 50 to 200 years. There are also thousands of antique items of daily use from different ethnic groups in Laos. They are made of silver, copper, wood, rattan, lacquer and other materials. At the museum, visitors can see Lao-style wooden houses, now a rare sight in Vientiane capital. They can see silk fabrics being woven and silk threads being dyed with natural colours in the traditional style. Visitors can participate in this activity, known as "the art of natural dyeing". They will be required to pay the cost of the silk and natural dyes that have to be brought in from rural areas. It will certainly be a memorable experience for visitors.

The museum has already been visited by tourists from many different countries, who are curious to know more about Laos' traditional fabric weaving techniques. Visitors include



ambassadors of the United States, Germany, France, Australia and Indonesia, the spouses of ambassadors of Australia and the wives of ASEAN foreign ministers attending the 10th ASEAN Summit.

The drive that resulted in the creation of the Lao Textile Museum was the love for the rich Lao culture, in addition to concerns that time-honoured weaving traditions would disappear because of the introduction of more modern methods.

The women who are the principal weavers here are assured of a steady source of income for their families, allowing them to improve their living conditions in a country that is on the list of least-developed countries.

We invite you to visit Laos; and if you do come, the Lao Textile Museum will be delighted to welcome you.

2004年9月12日

Lao Textile Museum

……ラオス繊維博物館のご案内……

ラオス繊維博物館は、ハンサナ=シサーン家の夢が実現したものです。当館は、すべてが完成したわけではありませんが、ラオスの希少な文化遺産の一側面を来館者に研究・鑑賞していただける場所です。古代から主にラオス女性によって織られてきた絹生地織物・色彩・模様はラオス文化を表現しています。このほかのラオスの文化遺産には、世界文化遺産として認可された古都ルアン普拉バーンとラオス南部のワットプー遺跡があります。

ラオス繊維博物館の館長ハンサナ=シサーンによれば、何年か前に外国人の骨董品の収集家および渉猟家が来寮し、骨董品の絹製品を買い漁りました。それらは特にサムヌアとシェンクアンを起源とする織物、ヤオ模様、ウドムサイ様式の製品でした。これら古来の傑作の多数がラオスから持ち去られました。



当博物館・館長：ハンサナ=シサーン

若者たちに対する長老の話がハンサナの耳に残っていました。「骨董の品々は貴重な文化遺産だ。そしてその家に住む人々に幸運と幸福を与えてくれる。さらに大事なことは、それが祖先の遺産であり、先代と私たちを近づける架け橋になるということだ」。さらにハンサナの祖母は「これらの骨董品をご覧ください。そうすれば、あなたの祖先と会えるでしょう」と語っていました。これらに鼓舞されたハンサナとその家族は、当時も今日も手工芸業の仕事をしていますが、できるだけ多数の骨董織物の収集を始めることにしました。その何点かは何百年前のものです。これらは、ラオス骨董織物の少なくとも何点かを救出しようとするハンサナ家の私的な活動です。

このような努力に当たってハンサナ家は幸運でした。ハンサナの夢とその意義を同様に理解する共感者・支援者として多数の友人に恵まれたからです。これらの共感者・支援者の中にはハンサナの父親が含まれています。彼の父親は多彩な才能を持った大衆的な政治家であり、詩人・作曲家・音楽家……でした。このシサーン=シサーンは長年に渡って情報文化省の大臣でした。この博物館の事業についてシサーンは、前大臣シレウア=ポウンカム氏と現大臣ファンダアンチス=ヴァンサ氏の支援と激励に謝意を表明していました。さらにハンサナは、アナンダ=パササイ氏の知見と有益な助言に感謝を述べています。

ハンサナは、次のような当家の外国の友人の貴重な支援と友情にも謝辞を述べています。
リンダ=シュネイダー、牛田進、阿部憲子、小泉綾、中内功、上田義朗教授……。

ハンサナは、将来の構想としてもう1棟のラオス式建物の建設を考えています。そこは、ラオスの伝統や文化を若い世代が体験できる教育センターとして、布地の織り方を学んだり、歌ったり、楽器を演奏したり、踊ったりする場所にするつもりです。

現在の博物館は、ホアファン・シェンクアン・ルアンプラバン・ピエンチャン・アトプーを起源とする骨董の絹製品を数百点収集しています。これらの骨董品は私的な個人の保管物であると同時に、その絹織物は、古い時代の創作者やその生活や社会を理解するための「文献」として研究に役立つかもしれません。

……ご寄付のお願い……

これまでに建物の建設は未完成です。資金と建築資材が不足しているために、長い期間その施設の完成は延期されてきました。現在、絹の染色と織物を実演説明するための当面の施設は博物館内に建設中です。これらの建物は建設計画全体の40%です。さらに完成した建物であっても、災害に対する安全対策や保険・防犯システムは未だに導入されていません。

ラオスの文化・伝統・遺産・芸術を収集・保存し、それらを後世に継承するために、そして当博物館を維持・発展させるために、今後もハンサナは微力ながら努力するつもりですが、日本の皆様にもご理解とご協力を賜りたいと思います。

このような仕事は本来、ラオス政府が公的になすべきことかもしれませんが、ご存知のように政府の財政は困窮しています。また限られた財政の用途としては貧困対策などが優先されています。さらに世界の主要な博物館や美術館を見れば、たとえば日本の大原美術館やポーラ美術館のような民間主導の博物館や美術館が重要な文化的貢献をしている事例が多々あります。

どうぞ、皆様からの貴重なご厚志を賜りますように心からお願い申し上げます。

Hansana Sisane (ハンサナ=シサーン)
Lao Textile Museum (ラオス繊維博物館)
Nong Thatay Village, Chanthabury District
P.O. Box 9821, Vientiane, Lao PDR
TEL/FAX: (856-21) 213467

(以上は、当館の背景についての覚え書きであり、公式の落成式におけるハンサナ=シサーンの挨拶からの抜粋です。その英文に基づいて邦文に抄訳・追記されました。)

- 9:00 Breakfast 昨日同様の方式。良好な European breakfast を採る。
- 9:30 トラック様ツクツクがバスまで送るため迎えに来る。欧米人ツアーリスト1組と同乗。
- 10:45 或るゲストハウス前に停車中のバスに乗り込む。欧米人ツアーリスト女性2名が積み残しになる。次の便(午後の便)にするよう言われている模様であるが、少しトラブル。往々にしてこう言うミスが生じるようである。満席状態にてようやく発車。
- 11:00 少し中心部から離れた北部方面へのバスターミナルに到着し、出発準備のためしばらく停車。その間、運転手は多くの荷物を屋根にのせ、小荷物は運転席横へ。荷物の運送の受託も兼ねているようだ。場合によっては、封書なども届けるとのこと。運転手の収入になるとのサチの説明。
 ようやく、VANG VIENGに向けVIENTIANE市内を出発。
 延々と平野部の国道13号線をひた走る。国道と言えども、その整備水準は低い。路盤にアスファルト舗装がほどこしてあるのみ。歩道は勿論のこと、舗装止、側溝、センターラインもなし。
 バイク、トラック、普通バスをけたたましく警笛を鳴らしながら、猛スピードで追い越して走る。VIPバスと言うものの、空調はあるがまともに機能せず。途中からは、その空調もスイッチを切る。
- 12:30 小規模な町並みを形成している地点で小休止。トイレ休憩。軽食をとるものあり。
 アイスクリームで休憩。
 この小休止以降、しばらくしてバスは山間部に入る。上りではバスは喘ぎながら走る。下りはまた、猛スピードで降りていく。これを繰り返して、途中、ナムグムダムを見て、湖畔で停車。受託した荷物を降ろすためである。
- 14:30 バスは国道筋の本来のバスターミナルから、ベトナム戦争時代の広大なアメリカ軍ヘリコプター基地を横切って、と或るゲストハウスに横付け。(乗客全てがツアーリストであるため。) 到着と同時に、ヘリコプター基地越しに異様な山容が目に入る。VANG VIENG 区域に入ってすぐ、車窓から巨大なセメント工場を見た。後でわかるが、あらゆる処に鍾乳洞(現地では Cave と称してツアーリストの Caving のポイントになっている)がある。
 一帯が石灰岩の台地である。
 バスから徒歩でホテルへ向かう。新設のホテルらしく、案内書に記載なし。
 探りあてて、歩く。バッグのキャスターが役を成さない道路。中国系住民が集まり、何やら、テントの下で飲み食いして談笑している。地域に災難が降りからからないように、お祈りする行事とか。
 途中、バーバーを兼ねて経営する店でペプシコーラで休憩。
- 16:00 ホテルELEPHANT CROSSING 到着。
 チェックイン後、街へ出て、散策。サナサイレストラン(SANAXAY)夕食。
 Stake, Springroll, 焼きそば風麺、ビアラオ
- 20:30 ホテル帰着。



↑ VIENTIANE バスターミナル ↑

VIENTIANE→VANG VIENG の車窓風景（平野部）揺れるバス車窓・・・ブレは容認を



遠くに水田、手前は休閑・2期作
地域だが、輪環



水稻作



林間にハンモック



乾季だが河川にはかなりの水量



極、標準的な農家住宅



蓄財による改築・高床にレンガ積で部屋を。
到る処で改築・増築工事が見られることとなる



ファームポンドとも言えない水溜まり。
魚を捕る姿も。



耕運機が。交通手段としても使う。



↓ 行程中、ナグムグ (Nom Ngum) ダムの風景に出会う ↓



ナグムグ (Nom Ngum) ダム。1971年、日本などの援助により建設されたダムにより、巨大なダム湖が出現した。生態系破壊との批判がある一方、豊かな漁場として漁獲は Vientiane へ供給され、地域経済に貢献していると言われている。先に見た Vientiane のタラートの淡水魚もここから出荷されたものもその一部に。発電された電力はタイへ輸出され、外貨獲得に貢献しているとも言われる。水面に出現した島には社会主義政権樹立時代に反動分子が送られ政治教育の場にされた。今なお、「男島」「女島」として男女別の刑務所として使われているという。・・・旅行案内書情報・・・Hmong の悲劇の時代と重ねて思うとき、特別の感慨を感じる。・・・日本の援助による湖島の出現であることを思うと。現在ではボート遊びをして、湖岸のレストランで魚料理を楽しむのが一般的なツアーリストのやり方。遊覧ボートや漁船が湖岸に停泊している風景が見える。写真にも漁船の姿が。



← 湖畔の集落の風景、こうした中に船着場があり、遊船、漁船が停泊。運転手はこの集落で運搬受託した荷物を降ろした。



← 近くで木材を切り出す様子も

↓ 【ベトナム戦争時代のアメリカ軍のヘリコプター基地跡】 ↓



南を



東を



南端を



東を。建物あたりがバスターミナル



東北を



北を

Vientiane から180KMの緑深いナムソン河畔に Vang Vieng がある。

1970年代のラオス内戦（ベトナム戦争中）中は北部山岳地帯に展開する共産軍掃討のため、基地を建設し、日夜アメリカ軍のヘリコプターが出撃して行ったところだ。広大な基地がそのまま残されている。舗装は部分的に残り、当時を彷彿とさせるが、ほとんどは、はがれ、デコボコの土。ここをツクツクが土煙りをあげて、横断して、街とバスターミナルを結ぶ。



↓ピエンチャンへ向かうバスが到着。客待ちのツクツク↓



広大な基地の向こうに特異な山容が迫る。



バスが横づけしたゲストハウス。ここからホテルへ歩くことになる

消耗戦に疲弊したアメリカ軍兵士に女性とアルコールなどを提供する慰安施設としてこの街並みが形成された基地の街と思われる。背後の険しい岩山と鍾乳洞、ナムソン川の清流は絶好のリクリエーションの場になり、若い兵士を心身ともに癒したものと思われる。いまでは、国道の開通で河、山の資源に恵まれていることから、ツーリズムのポイントになったと思われる



↑ホテルへの途中、散髪屋と小さな店を営む女性と出会い、ペプシで休憩。30歳半ばの女性にこの街がいつ頃出来たのか聞くと、「嫁いでくる前のことは知らない。年取った人に聞くとわかるだろう。その年代には英語が話せる人が多い」との答え。散髪代はラオス人は日本円で150円程度。外国人はその何倍もいただく。税を徴収されるからとのこと。徴税能力が国の統治能力のバロメーターとすると、この国の統治能力はかなりのもの。このことは、旅行中、あらゆる観光スポットの入場券で認識することとなる。散髪屋は椅子と鏡と簡単な流しだけの質素なもの。ラオス人一人が散髪中。

客には、バスから見た、セメント工場の従業員などが多いとのこと。



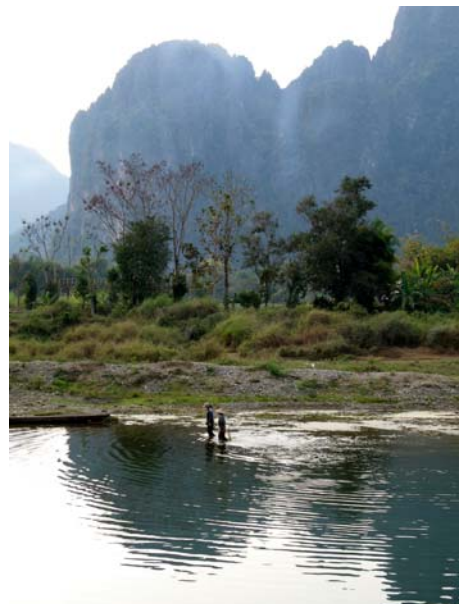
←バスターミナル。ルアンプラバン、ピエンチャン行きの便がある。僧侶の姿が見える。ルアンプラバンにでも移動するのか。料金表は英語表記がある。ちなみにルアンプラバン mini bus 95000K, express bus 85000K, Normal bus 75000K とある。1万kは約140円余。



← バスターミナルの
トイレ。1000K



← 国中どこでも建築ブーム。ツ
ーリズムが興ると施設整備、建
材業、住宅機器業、什器類、イ
ンテリア、商品生産農業まで
その野が広がる。地域経済の循環
の原型を見る思い。





↑夕食を採ったレストランからの暮れなすむころ。



↑ 日がな、ラオス風の床に寝そべるスタイルでテレビを見ながらビアラオで寛ぐ外国人観光客。
こうした過ごし方が好まれる。テレビはタイや日本のカーン。
ラオスの欧米人観光客は昔は食いつぶし者のバックパッカーのイメージだが、今日、知的水準は高い連中と見える。

- 9:00 European breakfast bread and butter ベーコン、スクランブルエッグ、フルーツ、勿論、ラオコーヒーも。
- 10:00 サムソン川を渡り、バンガロー村を見学。
ここで思案の結果、同行家族がレンタバイクを借りてくることとする。それ以降、バイクで移動することに決定。
待つこと30分。彼女がバイクを借りて到着。
バイクで移動して先ず、Cave 探索に向かう。乾季の休閑田を走って、道なき道のルートに Lusi Cave を目指す。乾季の田の切り込まれた畦を乗り越えてバイクを進める。この畦の切り込みが、後ほど、重要な意味を持っていることに気付くことになる。
Cave へのルートは竹竿に取り付けられた簡単なフラッグで示されている。道中約4Km。徒歩で向かうツーリスト、自転車で帰ってくるツーリストに細いルートで出会う。
Cave 入口に到達。3人の現地のラオス人が手持無沙汰に待ち構えていた、そんな様子である。道中、植林された林の中の、ことの外の冷気が印象に残る。この樹種の植林は各地で見られた。これは確認できずじまいに終わる。が、重要な意味を持っているように思える。
入場料を払って、ガイド付きで Cave に入ろうとするツーリスト6人が集まり、いよいよ、これらの者を一つのグループとして、待ち構えていた内の二人がガイドになって案内することとなる。
変哲もない鍾乳洞であるが、かなり（相当の）大規模なものであることが判る。安全なルートを手すり、階段でしつらえ、照明まで完備している日本の観光スポットの鍾乳洞とは大違い。バッテリーにつないだ照明器具を2人に一個の割で渡される。この照明器具も内2個がバッテリー切れを起こし、使用できなくなるのであるが。
チョットシタ Tough Adventure である。
木と竹と針金で作られた手すりや梯子はそれなりに設置されているが、強い洞窟内の湿気で年1回は取り換えなければならないとのこと。梯子に使われていた朽ち果てた材がその場に捨てられているのを見て少し不安がよぎる。
国の違いを超えても、鍾乳石の形を何かになぞらえて名称を付けて楽しむのは、変わりがないようだ。曰く、女陰、男根、恐竜、・・・などである。恐竜と言うのは、ダイナソア一と言うよりエレファントと言うのが地域性から言っても、適当ではないかと付言しておいた。
相当に奥まで入ってから、水の出現である。ここから奥は、膝までの水位の処、1か所、胸までの水位の処1か所ある。これを超えると滝の音の聞こえる、素晴らしいラグーンのところに行きつけるとのこと。
オイオイ、それは待てよ！同行のツーリストすべて、御免をこうむる意向。これにて退散。この場で Smoking Time 小休止の後、元に戻ることにした。吸い殻はそこらに捨てておけとのこと。
再び税の話であるが、ここでも、過去の日本の映画館のチケットのように、公的な検印が押された連番号のチケットもぎである。案内人との交流の後、再び、街まで帰る。
- 12:30 河畔のレストランに入り、手を洗って、一息着き、サンドイッチとレモネードで昼食とする。帰る途中、ゲストハウス群の汚水がそのままナムソン川に放流しているのを見る。
- 15:00~ Hmong の村を探索することとして、先ず、国道のガソリンスタンドでガスを補給し新設の有料橋を渡って、埃の舞い上がる道を約4~6Km 先の集落を目指す。
Nathone や Phone Ngorn などの集落である。

帰途、農婦に出会い、水田の灌漑施設の話や牛の放牧の話を何回も聞く。時刻は午後5時半を廻るころ。バイクで帰路に就く若者の姿や徒歩で勤めから帰る5～6人の婦人のグループに出会う。

現金収入を求めて、町へ出る様子がうかがえる。同質的な村落社会が徐々に変わりつつあるのか？

18:30

ホテルに帰り、シャワーで泥を落とし、夕食へ。
 レンタバイクの借り上げ時間を有効に使って、街外れまで探索。
 レストラン (BAN LAO RESTAURANT) で夕食。

Spring roll ,fried rice,スパゲッチ、ビアラオ
 街を散策、前夜から気になっていた屋台のホットケーキを持ち帰る。
 綿の帽子を買う。これ以降、この帽子を愛用。

22:00

ホテル帰着。



←朝の陽光を浴びて特異な山容はミステリアス
 朝は涼しく、日本の9月頃の感じ。しかし、今日も暑そう。

↓ホテルでの朝食風景↓



【ナムソン河の木橋を渡って、バンガローへ。】



←ツアーの案内看板

バンガローを经营管理する者。ここにもバスケットの案内。扱う場所によって微妙に価格に差が。 →



←典型的バンガロー施設。
 トイレ・シャワーは共同

安価なバンガローに宿泊し、日陰で読書しながら自由に過ごすのが欧米人ツアーリストのやり方。 →





← 長期滞在者には縫製の需要もある。Singerの刻印が懐かしい。トリが歩いているのは当たり前。



↑ 犬が居るのも当たり前。飼い犬か野良犬かの区別がつかないのが当たり前。こんなものをウオッチングしながら同行家族の到着を待つ。



Cave 入口、案内処

← どこにでも宗教施設。
どこにでも犬が居るのが当たり前。
→



← 魚網の繕いをしながら客待ち。興味を示すと実演してくれた。ありきたりの投網。ナムソン川で漁か

我々に次いで、ツーリスト現る。彼らとともに、Cave にはいることとなる。手書きの看板に Luci Cave。入場料 8000K、ラグーンへは 15000K、ここへは、ガイドなしで不可とある。例の徴税チケットである。 →



↑ 得意げな案内人。片言英語で名調子。暗闇。光は写真フラッシュのため。↑

鍾乳洞内風景・暗闇の中フラッシュの光で



←ここから先、膝までの水、胸までの水を超えてラグーンへ。
煙草休憩。この先断念。



← 案内処から Cave 入口までは急峻な岩肌。竹の手すり。木の梯子が針金で結えてある。 →





← 案内人としばしの交流。
近くに住んでいるとのこと。
トイレは？と聞くと、林の中とのこと。 →
そして再び、客待ち。のんびりと日が過ぎていく。



休閒地となっている水田が通路となっている。通路ではない。踏みならすから通路になったもの。
緩い傾斜地の水田。その畦が切り込まれた箇所がある。これを踏み越えてバイクを走らせる。この切り込みは畦の適度な高さで切られている。水田として水を張る時、必要な水位になれば、次の田に流れ出す、所謂、田越しに灌漑する工夫であることが判る。午後の村でも感じることであるが、休閒—耕作のブロック毎のローテーション、乾季・雨季の関係、家畜を入れる土地利用、田越しの灌漑など、村に土地利用調整機能があるとしか考えられない。腰高に刈られた稲株に牛の放牧。排泄物による地力の維持増進。よく考えられた農業生産方式である。小屋は農作業休憩所か農牧牛の監視舎。



↑ 牛放牧の監視小屋か、農作業休憩施設か？



木橋を渡ると左写真の露地に入る。
右はその前に開ける町並み。本通裏。



↑ 木橋を渡って町中へ。バイクは同行
家族

木橋を渡り露地に入る手前で、ゲストハウス群の排水がナムソン川に無処理のまま放流されているのを見る。

泡立つ排水を見て、露地を通り抜けた右手に右の看板。

看板には、小市域開発事業。排水路（Drainage これには下水の意味もある）整備事業。事業開始05年2月11日。契約金額17億K（日本円で2500万円）。発注者 市街地開発公社。施工管理者 OOコンサルタント。請負業者 KHAMFONG 道路橋梁建設会社。とある。排水路はあるが下水終末処理施設が見当たらない。



【Vang Vieng の中心から5km程度入った村にて】

ナムソン川の有料橋（ラオス人は通行自由）を渡って、土煙りの上がる石ころ道をバイクを進めた。



←どこからもこの岩山の風景が

どこの村にも子どもは多い。特に今日は日曜日。人懐っこく寄ってくる。バイクを止めて、木陰で休憩中



↑町から5kmも離れたここにも外国人観光客の姿が。飲み物のショップもあり、日陰で読書して、のんびり。

←村に入る手前に美しい水の流れが。この巨木はあらゆる処で見える。



←子どもたちが水辺で魚とりでもしているのか

トウモロコシの下にパンプキン。工夫された栽培→



←流れは険しい石灰岩の山から

↓小規模ながら、商品生産農業も→





←村の小学校。本日は日曜日
手前はかなり広い運動場。周囲は牛除
けの柵。子供は梯子を渡って。 →
学校教育は発達しているかに見える。
どんな Village にも学校が。
シェンクアンに建物の整備水準はかなり
高い、教員養成専門学校があったの
を見た。カリキュラムは？思想教育
は？など興味津々。通学する小学生の
姿は思いの外、小奇麗で楽しそうなの
がめについた。



農家の庭先風景、高床の下には、アヒル、鶏は育雛。簡単な石で組んだかまどには
火。その上に鍋。夕餉の支度か？その時間帯である。



この村に影を落とす。傾く太陽。

↑庭先に綿の木。実が熟して、紡いで寝具の木綿に。



↑バナナ、珍しい種類とか



↑木の上にドラム缶
の水タンク。自家水
道の代わりか。



この花が至る処に見られる。こ
の道の奥に Cave ありとの看
板。迫る岩肌。



←村の広場らしき。



上のこれらの写真は全て、田の灌漑施設（Irrigation Ditch 素堀の掘割）である。柵は牛除け。道路が築造されると、その下にヒューム管を敷設して水路が確保されている。用水、排水は勿論、分離されていない。例によって、ここでも田越の灌漑である。

下の写真は牛の放牧風景。柵で区割りかしてある。輪環的に放牧場所を変えて、排泄物による地力増強の偏りを防ぐためか、ここまで考えられていると思うと、どうしても、村の共同体が土地利用調整機能を有していると考えたいのは、共同体にロマンを求めたい私の思い過ごしか？単に、水が確保できない地域であることがその理由というのが正確なところだろう。

我々が探訪した村からの帰途、一人の農婦が土煙りの中を歩いている。呼び止めて聞いてみた。先にみた、水辺の家に帰るのだという。

これは田の灌漑用の溝か？ 「そのとおりです。これは昔からある」とのこと。

牛は耕作用に使う牛があるのか？ 「ない、ここの牛は全て売られる（食肉用 Beef Cattle のことだろう）牛は1年に1頭、生まれるのでこんなに増える。私の田に放されているが、私の牛ではない。勝手に入っている」とのこと。

次は何時の時期に田に水を入れるのか？ 「8月頃である。ここは2期作ができない。水がないから」とのこと。



牛は、極めて性格の温暖な小型のものである。いかにも粗食によく耐えそうな茶色の牛である。勿論、自然交配なのだろう。こうした飼い方なら、繁殖障害などは起こるはずもない。確実に、農婦が言うように、1年1頭は必ず分娩するだろう。九州阿蘇で見られる赤牛より少し毛色が薄い。在来種と思われる。

この牛は農耕に使われることはないものだが、地方によっては、水牛、ゼビュー（背にコブのある牛の種類）も散見されたので、これらはまだ、役牛として使われるのだろう。

牛にはカウベルが付けられている。ヨーロッパのものとは異なるが、目的は同じである。

この時期の村の色彩のイメージはここで見せている写真そのもの。オード色のモノトーンである。その中に時折見られる、さきに見せた赤い花・・・と言った強烈な印象。



道路沿いの民家の軒先で織物をする若い女性。以前、同行家族が訪ねたことのある処。覚えられていたようだ。
母親を探すが、居ないとのこと。隣には飲み物、スナック類を売る店。ちょっとした村の中心。



耕運機は重要な交通手段



←夕日を浴びるナムソン河左岸の風景



有料橋下の河川敷には商品生産少量多品目と見た



ナムソン川を紅く染めて、岩山に夕陽が落ち。夜のとばり。
昼間の暑さから少し解放されて、レストラン（BAN LAO）にて夕食。
屋台のホットケーキを持ち帰り。
鉄板の上で、生地を薄く伸ばし輪切りのバナナを乗せて焼く。その上に練乳を掛けて畳んだもの。
何とも、甘くて口に合わず。不思議なもの。

ルアンパバーンへ移動する。革命後、ルアンパバーンと改称されたのか？ルアンプラバンと懐かしさを込めて、呼ばれる場合が多い。我々の年代にはルアンプラバンという呼称はよく聞いた。ベトナム戦争当時、この文化性の高い古都がアメリカ軍の爆撃で破壊されるのが、我慢ならないとする運動が起こったと記憶する。恥知らずな破壊活動の象徴として、語られた記憶がある。特に京都では、日本の京都が破壊されるのに匹敵する蛮行であるとして、受け止められた。

- 8:00 昨日と同様の **Breakfast**. ただし、今日は月曜日。タイからの富裕層の旅客も帰国し、客数が少ないので、ビュッフェ形式から、注文による配膳形式に変わった。コーヒーは自由。
ツクツクが各ゲストハウスの客を集めて、米軍基地跡の例のバスターミナルへ終結。
- 10:30 **Express bus** がターミナルを出発。**Vientiane Vang Vieng** 間に乗車したバスと同じ形式のもの。料金二人で19ドル。約7時間の長丁場になる。
険しい山間地の道路。急傾斜地の曲線の多い道路を喘ぎながら、ひた走り、下りはかなりのスピードを上げる。険しい山間地にモンの小集落が点在する地域。今だに「制圧」しきれないモン兵士が時々出没するとか。「山賊」に出くわすこともあるとか。現に、現地在住の外交官はここをバスで通過しないようにとの通達も出されているという。後日、再度 **Vientiane** に入った時、丁度、我々が通過する日程のころ、何か事件があったようだ聞いた。
何が起こっても不思議ではないと思える地域であった。
途中、山間の **Village** の様子がよくわかる。焼畑、造林地、水の流れのある村、ない村、集落の中の水道に集まり、水浴びする子供、髪を洗う婦人の姿、山仕事に入る住民、屋根に使う材料を収集する人、箒に加工する草を集める人、焼畑の跡のバナナ栽培など、生活が垣間見えて、興味が尽きない。
行程中、3回の休憩。一回目はトイレ休憩、2回目は各自自由に昼食をとる。僅かな広がりには少しの町並みを形成している。行き交う長距離バスが終結している。近くには中学校らしきものもあり、この山の地域の中心と思われる。
3回目はトイレ休憩。路上に止めてのトイレ休憩。途中、**Province** 超えのゲートでチェックを受ける。
- 17:30 ルアンプラバンの郊外のバスターミナルに到着。各地からのバスが終結している。客を求めるツクツクの群れ。観光地である。
- 18:00 ツクツクに乗り合わせて、ゲストハウスに到着。メコン河に面した、かなり質の高いゲストハウスである。**Beauy Kokjieng guest house**.
- 19:00 ゲストハウスを出て、夜のマーケットを散策してレストラン探し。ラオ料理店で夕食を採る。仏画の額とオーストラリア人写真家が撮ったと言う絵葉書を買う。
さらに、ゲストハウス近くになって、ラオス人が屋外のレストランで賑やかに何やらパーティ。テーブルに座って、パンとビアラオを注文。
- 23:30 ゲストハウス帰着。門限を超えている。



ツクツクがターミナルに終結。屋根に荷物が。



山岳地域の村。
焼き畑があり、バナナの栽培が見られる。山容は険しく、Vang Vieng と同じ石灰岩の岩肌。



トイレ休憩地。山中の小さな集落。
ここにもタイの音楽 CD が、タイ文化の浸透は広くて深い。



Police の文字が





↑ 山中の町並み。ここでもツーリスト用ゲストハウスが。

↓ 険しい山容。ほとんどが焼き畑である。林相は低灌木。山の頂まで人の入った跡が裸地の通路となって見える。左の写真は遠くに道路が見える。バスはこれを通して、下りになり、ルアンプラバンに入ることとなる。



ラオスの森林は森林被覆率は僅か41.5%と言われる。貧困の中での人口増大による焼畑耕地の拡大が森林疲弊の原因と言われる。焼畑を禁止すると同時に、木材と非木材森林生産物の生産促進を図るアクションプラン「森林戦略2020」を進めている。日本の実情と合わせ、考える時、優れた政策と注目される。



↑ 路上でのトイレ休憩。その間も Vip bus などが猛スピードで追い抜いていく。子どもたちが興味深く見ている。



↑ 昼食休憩場所。往来するバスが多数終結している。ツーリストにももの売る人なども集まり、なかなかの賑わい。

近くに中学校もあり、退校時間なのか列を作るように出てきた。 →





バスの終結する場所は子供たちの遊び場になっている。学校は給食が無く、自宅に帰って食事を採る。昼食時間を過ぎていたので、退校後の子供の時間の過ごし方になっているのだろう。

ラオスでは物売りする子供は各地で見られたが、物乞いする子供の姿はない。ここで初めて、幼児を背負った少女がバスに駆け寄り物乞いを。



道路工事用車両が運搬される。

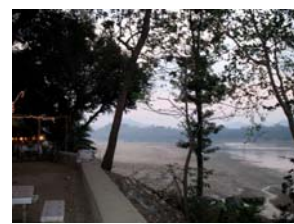
山に入る人。人里からは遥か離れている。



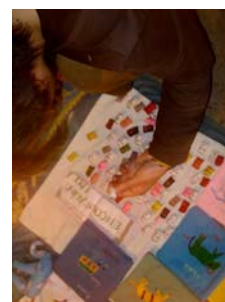
← ルアンプラバンのバスターミナルに到着。ツクツクにてゲストハウスへ。相乗り



約8時間の長帳場であった。暮れなすむ頃、ゲストハウスへ到着。メコン河が目の前に。



メインストリートの延長0. 7時ほどのところに、びっしりと夜店が立つ。外個人ツーリストで賑わう。歴史遺産都市として世界中からのツーリストが訪れている。この地より北部方面へは急激に訪問者が減少する。このメインストリートと交差する露地には食べ物や売物屋が立て込んでいる。



あらゆるものが売られている。手の込んだ絹織物の刺繍などで加工したものなどに外個人の人気が集まっている。ゼザインもモダンな要素を取り入れ、外国人好みに仕立てられているものあり、なかなかの知恵者がいるようだ。よく見るとアンティークな物に掘り出し物がありそうだ。得たいの知れないものもあり、興味が尽きない。Dragの流通に使われたと思える小型の携帯用竿はかり。古代の貨幣と称するもの。石器時代の石斧と称するもの。手作りの素朴な玩具。など・・・など

ミャンマーから来たものだというキセルを購入。お土産の調達によさそうだ。



夜のマーケットの通りから少し入ると、気の利いた店がある。仏画をモチーフにした掛物を購入。

このモチーフはオリジナルなものでは無いらしく。あちこちで見ることになる。

オーストラリア人写真家が撮ったと言う絵葉書、印画紙でプリントしたもの。質の良い写真。を3枚購入。

- 9:00 **breakfast** コーヒー、パン、バターで朝食。ゲストハウスの玄関の軒下に店が出ている。近隣の住民もここで朝食を採ることがあるのか、2-3人が朝食を採っていた。
- 10:00 ゲストハウスを出て、ルアンプラバンの街が一望できる仏塔へ登ることとする。国立博物館（かつての王宮）の真正面にある小高い丘。Phousi 呼ばれる仏塔。仏塔への階段近くにある Laha の店にて織物製品を物色。藍染の綿のシャツを購入。旧王宮（国立博物館）に入館するつもりであるが、昼食時間にかかるため、一旦、宿に帰り、残り少なくなったカメラ用メモリーカードを交換し、昨日の絵葉書に文章を入れ、郵便局へ持ち込み投函することとする。郵便局で切手を選びハガキを投函。約1週間で届くとのことであったが、帰国後、5日後に届くこととなる。明日のメコン河の船遊びを予約し、王宮見学に行くも、休館日。毎週火曜日は清掃のため、休館するとのこと。仕方無く、予定変更してワットシェントーンに行く。
- 17:45 ゲストハウスに帰着
夕食に出る。レストラン **Blue Lagoon** で夕食
豚肉の生姜焼き、蒸しライス、スパゲッティ、ビアラオ、コーヒー、マンゴージュース。14万キップ。外国人経営らしく、よく整ったレストラン。
夜のマーケットを見ながら、お土産を物色して、徒歩にて宿に帰る。



朝のメコン。右の巨木が印象に残る。



早くから客待ちするツクツク。この周辺にはゲストハウスが多い。



宿を出て、徒歩にて街中へ。その途中、裏町では朝市が立つ。この時間でもかなりの賑わい。しばらくして店じまいに入る。市民が食材を調達する市のような。食生活は豊かであることがわかる。米はラオス米。陸稲は粘り気が適度に有って、日本のコメの食感によく似ている。

魚はメコンの淡水魚。どこに行ってもテラピアがある。これは外来魚ではないのかな。養殖されているのか？一時期、日本でも、鯛に似ていることから、〇〇鯛との名称ではびこっていた。



少量が単品で出されている。近くの農家が売っているのだろう。
 上中央は芋。生をかじると、何とも味の無いものであった。
 下の左は日本でも秋に山で自生しているキノコ。旨い。
 左の塀は王宮ではなかったかと思う。こうして朝市が立つ。



王宮（博物館）裏口



立て看板に見入る老人。こんな建物が立ちますよと言う宣伝。左はその工事中。政治スローガンではない。この国で政治スローガンは見なかった。



この街でも建築ブーム。
 この建物は木造

街中、到る所にワットが見られる。それぞれ趣が異なり。興味深い。これはワットマイ (Wat Mai)。この写真には無いが、5重に重なった本堂の屋根は優美で美しい、夜のマーケット越しに見える姿は印象的。本堂の壁のレリーフは仏教の輪廻を表していると言われる。

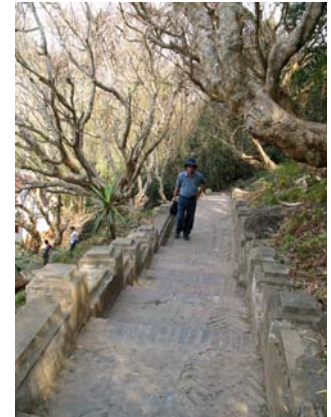


←訪問歓迎。ラオスの写本（経典）の保存に感謝。写本（経典）保存センターと英文が…



Laha の店先。日本人も協力している活動らしい。高品質な自然織物。布、クッション、帽子、スカーフ、キルト、部屋の服飾品、バッグ。綿の藍染シャツを購入、これ以来、着用してラオスを歩くことになる。

【プーシー(Phousi)】



堂の中。猫が・・・

案内書によると、328段の階段を昇って頂上へ。2人の仙人が神様に導かれてこの山にたどり着き、ルアンプラバンの街を造ったという伝説の山。展望台としてツーリストに人気のあるあるスポット。夜のマーケットからもライトアップされた仏塔が見える。



頂上からの展望。中央に王宮（博物館）その先はメコンの流れ。ワットマイの優美な屋根が見える。茶色の僧衣は高僧、黄色は修行僧、白は尼僧とのこと。



バスターミナル方向を望む。川はナムカーン。蛇行しながら、この町で、メコンに合流する。右は空港方向を望む。左上方に滑走路が見える。



Post Office 外国語表記はフランス語。



ラオス開発銀行。ここで両替



←公園は常設のマーケット、夜も昼も

街中の簡易ポスト。切手も売っている。 →



街を歩く僧の姿。この町は標高600mのところ。朝夕は涼しいが、真昼の太陽は強い。日よけが欲しい。むしろ、観光客は日除け無しで歩く。我慢強い。早朝、5時起きすれば、街の全域で托鉢する僧の姿が見られるとのこと。僧に敬意を表する宗教儀式が半ば、観光化されたと言われ、ゲストハウスにも見学する者の心得が書かれている。この行事に敬意を払うことが第一。

街なかを歩くと、ガイドブックにも載らないワットがある。住職(そんな僧の制度があるのか知らないか)の気持ちを感じられるような、美しくつらえられたワットを見た。本堂の日蔭で読書して、時間を過ごす外個人観光客の姿も印象的。数葉の写真を示す。 ↓





←廃棄物処理は大きく立ち遅れているが、一方では廃タイヤを加工した丸いゴミ箱が街に・・・



↑昨夜のレストラン、工芸品ショップの真昼の姿



サッカリン通り裏のワット。こうしたところは自由に出入りして見学できる。





↑ サッカリン通りに面した伝統ある小学校の風景。保護者がバイク、ツクツク、車で迎えに来ている



サッカリン通りのワット。ワットが集中した地域で、自由に出入りできる。



この地区には観光客相手をする店も多い。近くの村の民具、織物、和紙など。右の和紙を売る店で気の利いたものが売られており、照明器具に最適。購入することに。近くのメコン河畔の村に和紙をすく集落あり。明日のメコン河の舟のツアーのコースになっている。

【ワットシエントーン (Wat Xiengthong)】

1560 セーターテイラート王によって建立された寺院。ラオスの寺院の中で最高の美しさを示すものと言われている。本堂はルアンプラバン様式と言われる設計になっている。特徴は優雅に、しかも大胆に湾曲した屋根にある。ピエンチャンの寺院より、屋根の傾斜は緩く、幾重にも重なるゼザインが特徴とされる。



↑寝仏が収められた小さな祠。正面の仏道の裏。



↑規模は大きなものではないが、その特徴はよく理解できる。美しい姿である。控え目で繊細な感情がよく表れていると感じる。我々にも違和感のない優美なものとして受け入れられる。手前は小さな祠の壁面↑



←本殿背面の壁に施されたモザイク。「黄金の木」。かつてこの場所に立っていたと言われる高さ160mの大樹がモチーフになっていると言う。仏教にまつわる物語が描かれていると言う。質の高い、品格に溢れたもの感じられ

↓小さな祠の背面にも同種のモザイク



↓小さな祠の入口装飾





1960年に行われたシーサワン王の葬儀で使われた霊柩車が収められている建物。黄金の龍をモチーフにした霊柩車は葬儀の盛大さを彷彿とさせるものである。

1960年と言えば、つい、近年のことである。フランスの植民地支配が終焉を告げ、インドシナ戦争からベトナム戦争の内戦の困難な時代背景である。

19世紀なかばにフランスはラオスを植民地支配したが、ルアンブラバン王国だけは王国の体制を存続させた。勿論、王には統治上の権限は与えなかったが。

終戦直前の僅かの期間、日本軍が支配し、ルアンブラバン王国を独立させる。この独立は第二次大戦の敗戦とともに失効する。フランスは再び植民地化を開始。臨時人民政府を追放し、ルアンブラバン王国を擁立してラオス王国を成立させ、実効支配した。内戦状態が続く中で1953年フランスーラオス友好条約を締結しラオス王国を完全独立させ、ラオス王国が国際承認されたが、ラオス自由戦線の抵抗は続いた。1954年ジュネーブ条約が締結されたが、履行されず、二つの政府の存在が続いた。ようやく1957年成立した第一次連合政府も崩壊、内戦へ。1962年、第二次連合政府が成立するも、10か月で崩壊。1964年にはアメリカ軍による解放区への爆撃開始である。ベトナムへの北爆即、ラオスへの介入である。このような時代背景の中での王の葬儀を重ね合わせて考えると、感慨深いものがある。当時の左派、パテト・ラオの流れを汲む現政権がこのルアンブラバンや宗教をどう扱おうとしたのかとも合わせ考えると、興味はつきない。今なお、ルアンブラバン近辺の山中に生き残るモン兵士の掃討作戦が展開されることもあるとの事実を知るにおよんで、世界遺産都市として欧米人ツーリストで賑わう観光地としての現在を重ねあわせる時。……

ラオスが永遠に平和であることを！



↑ 王の棺を飾る黄金の龍

← 棺を飾る天蓋



← 境内には巨木がよく似合う →





←ワットシェントーンのサッカリン通りの反対側の出口を出て階段を降りると、そこはメコンの流れ。
少し上流でナムカーン川と合流する。

→



ツクツクで宿に帰ると、メコンに夕陽が落ちる頃



夜のマーケットの通りと交差する細い通路は食べ物の屋台。
匂いで充満。インド風カレーが旨いとか。ツーリストの姿も多数。



今宵はレストラン「ブルーラグーン」(Blue Lagoon)で夕食。
スイスのレストランに長年勤めていたシェフが開いた店とか。マネージャーも外国人。
ヤシの庭に適度な照明。野外で心地よい席。料理の質、施設の質も優れた西欧風。その代り、料金も高い。14万キップ。起業者は何らかの関係で外国人。



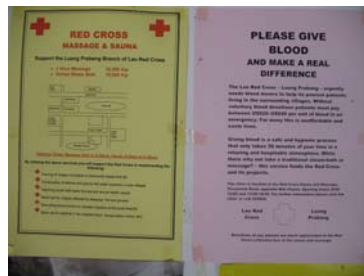
食事を終えて、再び夜のマーケットへ。ルアンパバーン最後の夜。少し買い物をして徒歩にて宿へ。



←夜のマーケットの灯りの向こうに、プーシーのライトアップが、この上を間じかに、航空機が舞い降りる。
ゲストハウス通りは、統一した手作りの照明。 →



- 8 : 3 0 **Breakfast** ゲストハウスで例の朝食。
前もって予約したボート(メコン河の遊舟)で、上流に遡り、酒造りの村、紙すきの村、織物の村を巡り、パークウー洞窟(Pak Ou)を巡る約2時間余りの船旅である。
- 14 : 0 0 昨日は休館日にて見学出来なかった王宮(ルアンプラバン国立博物館)を見学。
- 15 : 3 0 ツクツクにてルアンプラバン空港に向かう。
- 16 : 3 5 **Lao Air** 機に搭乗。**XIENGGOUANG** へ向かう。約30分の飛行時間。
- 17 : 0 5 **XIENGGOUANG** 空港に着陸。
ホテルから出迎えの車が来ている。調子のいい若者。これが、荷物の手続きなど、やってあげると言う。後ほど判ることになるが、これが、ホテルの人間ではない。実はホテルに巣くう旅行者の人間である。**VANSANA HOTEL** 着。
一旦、チェックインをして、18:30からホテルロビーにて先の旅行社の若者と打ち合わせ。我々の前に同じ場所で、フィンランド人婦人3人と打ち合わせをしていた。このフィンランド人は我々と同じ航空便でルアンプラバンから到着したものである。この旅行社は90ドルから100ドルのツアーを提案してきた。行程はモン Village, Jar 平原 Site 1、Site 2、昼食、Site 3、被弾し打ち捨てられたソ連製戦車を廻る。2日目は蒙の Village, Tam Piu 洞窟 (Tham Piu) , 昼食、Hot spring を廻ると言う。これらのポイントは、市街地からも離れており、ツクツクの乗り入れが禁止されている。
旅行社やホテルなどで車をチャーターするしか方法は無い。
相場からみて、あまりにも高額過ぎる、難色を示し、折衝を続けると、同行者のラオス語で態度一変、先ほどのフィンランド人グループは20ドルで同じコースを廻る、これに同乗するなら20ドルでOKとのこと。
再検討の要あり。確答は避けて、この提案に乗るなら、後刻、電話することにして電話番号を控え、ともかく街へ出て、旅行社を探ることとする。
ホテルに車を用意させ、街へ出る。同乗したのは、フランス料理を食しに行く先ほどのフィンランド人3人、帰宅するくだんの旅行者の人間、我々2人、計5人である。市街地のかかりで我々2人、旅行社の人間が先に、降車。降車地点近くに旅行社あり。**Indochina Travel** 社である。15ドルで同じコースを行くとのこと。明日はこのツアーに乗ることにし、2日目はさきの20ドルのコースを採ることとして、電話連絡。OK。
街を巡り、レストランで食事。ホテルへ帰着。ホテルの門限は午後9時。
ホテルのシャワーが冷水。冷水にてシャンプー。電気温水器のスイッチの入れ忘れ。これで、ひと悶着。



ゲストハウスの張り紙。観光案内。外国への電話の架け方が説明してある。
赤十字社がマッサージとサウナを経営しているらしい。献血を呼び掛けるポスター。この赤十字のポスターとドゥネイシオン Box はホテル、空港などあらゆるところで見られた。
メコンの朝。今日の暑さも厳しそう。

【メコンを舟で遡る】



↑ 遊船が終結する船着場。昨日のワットシェントーンを降りたところ

←メコンの川風が心地よい→



最初のメコン河畔のモンの Village。紙すき、織物の村。直売所も。
Ten Minutes の大声。10分で舟に戻れとのこと。





悠然たるメコンの流れ。少し濁って見えるのは、泥の色彩が溶けていると思われる。濁っているかと言うとそうではない。ましてや有機物の汚染ではない。雨季には水量が増し、水辺の樹木の根が水に隠れる。かなりの水位差。



【酒つくりの村に上陸】

またしても Fifteen Minutes の声。15分で舟に帰れとのこと。



米焼酎である。これをラオ・ラオーと称する。なかなかの独特の風味である。このラオ・ラオーを観光客向けのレストランで注文しても、置いていない。これとは別に、ビアラオを作る企業がラオ・ラオーと称して米焼酎を販売しているが、これはこの風味の無い、日本のかつての時代の安焼酎である。庶民が好んで口にするようだ。蒸留の方法がベニヤ板に手書きしてある。ドラム缶のようなもので、酒を加熱し、その蒸気をドラム缶に窪みのあるフタを乗せた上から水で冷却して、蓋のうしろ側に凝結してくる液体を集める方法である。単純明快な方法。この方式は他の村でも同じである。風味はそれぞれに異なる。3本をお土産に買う。



人の良さそうなおばさんが酒を売る。瓶はジュースの空きビンとのこと。(サチの話)。栓は木、ビニールが巻いてある。瓶には竹を細く薄く加工したもので美しく装飾されている。この装飾はなかなかの参考になる。村のたたずまい。織物売るショップも。村にはワットも広場もある、大きな村と見える。



←船着場と村との間は木製の通路を歩く



船着場で再び舟に帰る→

【パークウー(Pak Ou)洞窟】に到着

ルアンプラバンからメコンを遡ること約25キロ、メコンがナムウー川と合流する地点にこの洞窟はある。洞窟は2か所ある。日本の「五百羅漢」のような雰囲気です。4000体以上の仏像が置かれている。



←船着場の棧橋。竹の筏。よく工夫されている。急な階段を上ると洞窟。



←ナムウー川との合流地点。水の色が異なる。
船着場は遊船でヒシメキ状態。→





【王宮（ルアンプラバン国立博物館）】



国立博物館は館内写真厳禁。靴を脱ぎ、脱帽して手荷物のすべてを預けて、入館が許される。ガイドブックによると、かつて王宮だった建物を利用して王朝時代の歴史を展示した博物館。王族が使用した家具や調度品、各国使節からの贈答品などが展示されており、当時の繁栄をしのぶことができる。

建物は1909年、王シーサワンオンとその家族の住居として建設された。当時はフランスがラオス全土を植民地支配していたが、ルアンブラバンだけは「保護領」として形式上の王政を続けさせた。ラオスの王を保護しているとの印象づけるためにこの王宮を設計したと言われている。

1959年シーサワンオンの逝去後もその家族が居住していたが、彼らをも巻き込んだ内戦に突入する。1975年現政権（パト・ラオ）がルアンブラバンを掌握すると、家族は北部に送られ、博物館として開放されることとなった。1967年に旧ソ連の画家が描いた家族の肖像画（優れたものではない）が展示されていることや、日本ゆかりの品が展示されている、ことなど興味深い。

皇太子が1965年に訪日し現天皇と会見している。これらの時代背景の中での王族の状況を想像するだけでロマンである。



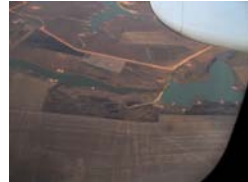
แผนการบินประจำวัน 21 FEB 07			
FROM LUANGPRABANG TO	FLT. NR.	CHK-IN	DEP.
SAKONK	Q-633	09:30	11:30
VENTIANE	Q-102	10:30	12:30
SAKONK	Q-942	10:30	12:30
HANOI	Q-313	11:40	13:40
SAKONK	Q-943	13:20	15:20
VENTIANE	Q-110	14:35	16:35
VENTIANE	Q-112	14:50	16:50
VENTIANE	Q-116	16:10	18:10
VENTIANE	Q-104	17:10	19:10



ルアンブラバン空港の様子。他では見ることの無かったファーストフード店、Smile Burger とある。壁にはルアンブラバンの観光地図。世界遺産都市ルアンブラバンへようこそとある。白板に手書きの発着表。



国花を尾翼にあしらったラオ・エアーに乗り込む。MA60のメーカーがどこなのか、未だにわからない。
ルアンプラバンからピエンチャンまで飛ぶ便、途中でシェンクアンに立ち寄る便。



ルアンプラバンを離れて

シェンクアン上空に入る。赤い直線道路がやたら、目に入る。
明日からこの道路を通過してツアー。



シェンクアン空港に着陸。居並ぶ空港職員を見ると、何やら、ピョンヤン空港に降り立った雰囲気。



宿に着くと既に落日。

XIENKOUANG は正しく言うと Province であって、日本で言えば県にあたる。

我々が投宿しているのは、ポーンサワン市 (phonesavan) である。

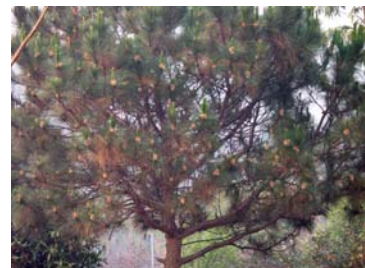
地方行政の中心で市内には Province のオフィス、軍の司令部、教員養成専門学校などの施設が集中している。

- 8 : 0 0 VANSANA HOTEL で朝食。European style の朝食。快適。
ホテルの車で街へ。
- 9 : 0 0 昨夜、予約した旅行社 (Indochina Travel) で手続きし、ツアーの車を待っていると、昨夜、ホテルで折衝した旅行社の若者が現れる。Indochina Travel の若者と何やらヒソヒソ話。
ツアー料金はいくらにしたのかのやりとりをしている模様。
この旅行社とは友達と言うが、何か解せない。不審が残る。昨夜の 90 ドル～100 ドルの価格設定は何だったのか?
Don't make a fool of foreign visitor とでも、喚きたい感じ。
- 9 : 1 5 ツアー車が旅行社事務所前を出発。オーストラリアからのツーリストなどと同乗。合計 9 名の満席。他に、運転手とガイドが付く。ガイドの英語が聞き取りにくい。
ジャール (Jar 英語ではジャー平原と読むべき、Jar 壺) 平原 Site 1, Hmong Village (酒と織物の村)、Site 2、昼食、Site 3、被弾したソ連製戦車を廻って、出発地に帰るコース。
- 14 : 0 0 旅行社事務所前に帰着。
MAG の事務所へ行くも Closed。午後 4 時～8 時まで開くとのこと。とりあえず MAG 事務所隣接の同経営のレストランレーターでパイナップルシェイクで休憩。美味。
市民の市場を見て回る。その後、中国資本が建設したショッピングセンターのような新しい施設を見学、買い物。
オープンを待って、再び MAG 事務所へ。10 ドルの Donation で T シャツをくれる。
街を散歩の後、再びレストランレーターにて夕食。
- 20 : 4 0 ホテル帰着。

【MAG】イギリスに本部を置き、シェンクアンで活動する不発弾処理専門組織。
NGO である。



早朝。ホテルのバルコニーから。朝もや。
樹木は日本の松と同じ。雀の囀り。





↑朝のポンサワンの街。何かげだるそう。今日も暑い。

【ジャール平原 (Jar 平原) に入る。】

ジャール平原

シェンクアン Province の東部に広がる、低い草（ところによっては低灌木あり）に覆われた広大な平原。3カ所の小高い丘に、大きなものでは直径 1.5m、高さ 2m にもなる石の巨大な壺が集中して存在する。これら3カ所が Plain of jar site 1, site 2, site 3 と呼ばれている。不思議な光景である。

これらの壺はサムア地方にあるものを含めると500個以上あると言われ、ジャール平原にはその半数以上がある。2世紀前後のものとも言われ、これが何であるかは、諸説あるようだ。曰く酒壺、米壺、石棺説である。調査によると、周辺から人骨、土器、石器、鉄器、ガラス玉などが発掘されている。

このことから、石棺説が有力である。ふたのあるものはほとんどない。ふたのあるものでも中には何も発見なかった。盗掘にあったのかもしれない。そんなことを考えると我々の感覚には石棺説が納得し易い。

もともとこの地にあった岩石を掘り抜いたものではない。どこから小高い丘に運び込まれたものであると言う。資材と労働力の調達などは考えると、ミステリアス。

また、この平原はラオス内戦（ベトナム戦争）時代には Combat field, battle field になったところである。

空からは、アメリカ軍による爆撃を受け、悪名高いクラスター爆弾の攻撃にもさらされた。

今だに、不発弾処理に資金と労力が投入されている。

↓サイト1入口の看板



↑MAG(Mines Advisory Group)

ジャール平原サイト1の不発弾処理計画

ジャール平原サイト1, 2, 3, の不発弾処理は UNESCO、ラオPDRツーリスト当局、情報文化省との共同プロジェクトとして実施されてきた。この不発弾処理のための資金は NZaid が用意した。

開始時期 2004年1月26日。完了日時 2004年10月29日。処理された数値的データ。地表下まで処理された面積 24379平方M、外見上処理された面積 225000平方M。植生をカットした面積 21832平方M。発見された不発弾 127個を破壊。発見された砲弾の断片など 31814個。

地表に設置した色づけしたコンクリートのマークは処理された区域を示す。白と白の間は地表下まで処理されたところ。赤で示す区域は地表下まで処理されていない。地表のものだけが処理されたいわゆる外見上処理された区域である。見た目でクリアになっているだけ。白の区域に留まる様MAGは助言する。

観光案内看板には、ジャール平原サイト1は251ヘクタール。壺の数は334個。最大のもの径 2.5M,高さ 2.57M。



↑アメリカ軍の爆撃によるクレーター
看板に爆撃年が書かれている。1970
↓

↑MAGの標識。コースに埋められている



↑ サイト1の洞窟。天井には外
← に通じる穴がある。人骨が発見さ
れていることから、ここで火葬され、
壺に埋葬されたとの説がある。
ベトナム戦争当時は燃料庫や弾薬
庫に使われたと言う。この方が生々
しく現実味がある。





↑ Trench Line の標識。ベトナム戦争当時の塹壕の跡。戦闘場面が地形と重なり、想像される。パテト・ラオ、モン兵士、アメリカ軍が消耗戦を展開したものである。

ガイドは「モンは誰が兵士なのか分ら無かったとのこと」
ベトナム戦争時代に絡む説明をしながら、「ここにアメリカ人がいたら気を悪くしないでくれ」「気にしないでいいよ」との声。
モン兵士のことを語るのはタブーなのか？「なんでも聞いてくれ」とのこと。



↑ MAGの白い標識内を歩いて見学する。通路は踏みならして裸地となっている。

ジャール平原の様相。従来から低い草で覆われた地域。乾季は干上がった茶色の大地であるが、雨季には緑の草で覆われ、美しい風景が出現すること。政府はこの地域では畜産の農業を進めている。隣の地域は水も十分であり水田などの農業が推奨されている。土地利用政策が示されている。

【モン village、酒造りの村】



【サイト2】

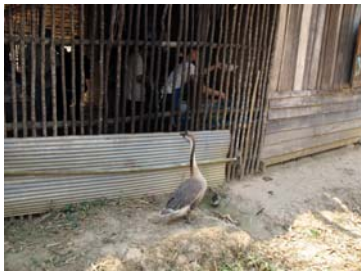




←丘の下方に水田が見える。1ヘクタール程度である。谷筋にあり、天水が集まり、灌漑される。天水が無い季節は水稲作が不可。単純明解。山が終わる地点で少し自然の窪みが見られる。それだけのこと。右は燕を捕獲するための隠れ小屋。ここで日がな、獲物の飛来を待つ。これまた単純明解な狩猟。→



【昼食を採った「レストラン」】



↑レストラン裏。アヒルが。竹の柵のうち側が調理室

↑政府の公衆衛生啓発ポスター
蚊に刺されるな。手を洗え。
熱をかけて調理せよ。

【サイト3へ】



木橋を渡ってサイト3へ。
右は雨季に使用される。これだけの水位差。



畦を通る。左は石で補強されている。



水のあるところでは、野菜の栽培がおこなわれる。灌漑は同じやり方。畦を切って田越しに



【サイト3】





【被弾し打ち捨てられたソ連製戦車】



ベトナム戦争で戦場になり、被弾し打ち捨てられたソ連製戦車。松林の樹間から集落が見える。こんな処が戦場に。そして今、観光のスポットに。操縦キャビンに被弾した穴が。見つめるツアーリストの心情は？



午後2時、再び、街へ帰る。
けだるい午後。



【新設のマーケット・ショッピングセンターのようなもの】



中国の支援で建設されたものとか。4階建ての建物にテナント方式で出店している。テナント料がいかにばかりか、知らないが、一階はシャッターが閉まっている店が多い。何故か、吹き抜けが好まれるようだ。一階の噴水は水が無い。エレベーターは動いていない。ここには食料品は無い。



モン族の衣装も売られている。周囲にモン族が多いことが推察できる。化学繊維で色も鮮やか過ぎるが・・・



←ここでも大量のタイのCDが

大量の商品であらわれている。くつ、カバン、バッグを売る店。アイテムも極めて豊富。殆どがタイ、中国製品。→支援で建設した商業施設に自国の製品を大量に送り込む狡猾さ。



←大量の札の印刷物が売られる。折り紙のようにして寺へお供え。何故か義歯が売られている。近くの道路際の掘っ立て小屋で足踏み式のドリルで治療する歯科診療が行われていた。



←建物入口。4~5社が激しくシェア争いしている。携帯電話業界。ラオテレコムが最大のようなのだ。

隣接のショッピングセンター。CD専門店が軒を並べ、自転車やバイクの店が多い。住み分けされている。





↑モン族(らしい)おじさん。この建物で店を出しているとのこと。家族がハノイへ留学中のことが自慢のようだ。ベトナムへの憧れが感じられる。

【庶民の食料品のマーケット】の状況をお見せする。



←トリが生体で売られている。パードアイランドレッドの様な羽に縞のある、見るからに旨そうな在来種である。



隣接して織物や繊維製品を売る店、バイクの修理、タイヤなどの店が集まっている。集客施設になっている。



サワガニ、ウナギ、カエル、タニシの類。新鮮、生きている



←かつては、こうしたモン族の衣装の多くの老人がこの市場を出入りし、出店もしていたと言うが、今では、その姿が見られないと言う。かろうじて、一人を見つけ、シャッターを押し。この市場も間もなく改築されるのだから、市民生活の主要な場面から追い出されることが明白である。



←今、露天になっている場所も、以前は屋根が被っていたと言う。その下にはモン族の市が立っていたとのこと。近く、改修される模様。少量出荷の食材が並ぶ。右は漬物。これがなかなか、いける。





豊富な野菜類。香りのする野菜が多い。キャベツの荷姿に興味。茎の部分に紐を通し、輪結び。そのまま持ち運び可。栽培種子は殆ど、中国産。周辺の店で見かけた。



←単品少量を子どもが売る。



魚醤などの調味料



←奥のものは巨大なネズミ

←市場裏では工事。排水管が市場改修か



【MAGのOffice】



ポスターに書かれている内容

ジャール平原における貧困との闘い。

不発弾処理、貧困にとって代わる観光、持続可能なシェンクアンにおける資源管理。

プロジェクトの実施者—ユネスコとMAG。協働パートナー—ラオスのユネスコ委員と情報文化省、観光所掌当局。資金提供者—NZ AID/UNESCO。実施期間—2006年11月1日～2010年10月31日。プロジェクトの目的—シェンクアンに於けるコミュニティが観光から利益を得ることを可能にすること。(だから、貧困を削減し、ジャールサイトを保護すること。シェンクアンプロビンスのジャーサイトを含む7つのジャーサイトの不発弾の処理はこのプロジェクトを構成するものの一つである。不発弾はベトナム戦争時代からほったらかしにされ、重大な汚染とも言えるものであった。ジャーサイトを安全にすることは地域のコミュニティや観光客の安全を確保する上で重要なことである。さらに、不発弾処理の活動はラオス政府の世界遺産申請にとって重要なものとなる。もし、申請が承認されると、観光客は爆発的に増えるだろう。そうすれば、地域社会にとって、所得の機会を増大させることになる。MAGは、また、2004年におけるジャール平原の不発弾処理にも関わってきた。この時には、175個を最も訪れる者の多い三つのサイト(約70ヘクタール)で発見し、破壊した。

この今回の前のプロジェクトではMAGとUNESCOは考古学的不発弾処理の方法を開発した。鋭い破片にまで打ち砕く方法では、ジャーにダメージを与える可能性がある。したがって、そのような方法を探らずに、不発弾を安全にする手法を用いた。MAGはまた、考古学的な関心についての問題を惹起しないような特別の掘削方法を採用した。・・・と書かれているがそれらの方法が如何なるものかは説明がない。・・・



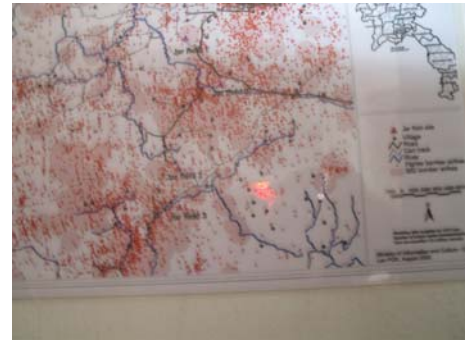
不発弾の種類が分解して展示してある。不発弾処理の状況が写真表示してあり、英語(聞き取りにくい)とジェスチャーで説明してくれる。よく言われるように気の遠くなるような作業。

右は悪評高いクラスター爆弾。写真の下に、子爆弾が分解され横に長く並べて展示。





左はドネーションボックス。10ドルでここでしか手に入らないTシャツをくれる。10ドルを投入。Great works. Peace forever in Lao from Japan Takuji Maekawa と署名。右はアメリカ軍による爆撃を示す。黒いドットは Village の位置を示す。赤い大きいドットは戦闘爆撃機の爆撃地点を示す。細かい赤い点々の範囲は B52 による爆撃を示す。B52 がクラスター。これを見ると、サイト1, 2, 3 はまだ、少ない部類に入る。



ポーンサワンの街に陽が落ちて、長い一日が終わる。



MAGのオフィスの隣に、MAGに所属しているアメリカ人が経営するレストラン「クレーター」が。良質な雰囲気と納得できる料理を出す。ここで夕食。その隣はMAG活動の諸機材の置場。滞在した2日間、この車両が動いた形跡は見られない。



- 7:00 起床。VANSANA HOTEL で朝食。
- 8:00 ホテル前からツアー車出発。前日のフィンランド人グループと同乗。計5人のツーリストと運転手、ガイド（一昨日に折衝した旅行社の若者）
モンの村、プータイ族の村、タンピウの洞窟、昼食、Hot spring を廻るコース。
- 14:00 ホテル帰着。
フィンランド人グループは、即、荷物をまとめ、空港へ。我々より早い便でビエンチャンへ向かう。
我々は、昨日ランドリーに出した洗濯物を受け取り、価格について少しトラブルの後、午後4時頃、ホテルの車にて空港へ向かう。
- 17:35 シェンクアン空港を離陸。
機内で水とファーマーズショップ製の果物加工菓子が提供される。約30分の飛行である。機内には足にギブスをし、点滴のビンを持った病人も同乗。
例によってルアンプラバン発ビエンチャン行きの機に途中から搭乗することになる。
- 18:05 ビンチャアン空港に着陸。
空砲には同行者の友人、Tさん、Mさん（ビエンチャン在住日本人）がホンダアコード（ジューデル車）で出迎えに。チャンタパンヤホテルまで送っていただく。チェックイン後、すぐにラオス風焼き肉店で夕食を共にすることにする。
Tさんの男友達（Kさん）も途中から合流。5人でタラフクに牛タンを食し、ラオビアを10本。少し飲み過ぎ。
3人と別れ、Yさん（ビンチャン在住日本人）の待つ、Bar Jazzyへ出向き、ラオス旅行の印象などを話す。
- 22:00 ホテル帰着。同行者は自室へ帰る。

【モンのVillage】



←この地域だけではなく、夫々の集落で全ての農家にこのマークが掲げられている。人口把握や徴税の基礎資料になるのか。





豚は首に▽形に組んだ木が装着されており、何処にでもやたらに出入り出来ない工夫がなされている。放牧状態であるが、自ずと動線が決まる。優れた工夫である。中国南部の黒豚の系統と思われるが、在来のモノだろう。この豚は美味だと思われる。バナナ、やし、サトウキビが見られる。

その他家畜では七面鳥、鶏。

この村はベトナム戦争の廃物を生活に利用していることで知られている。



村の穀物（米）貯蔵庫。
砲弾の薬莖が高床の土台に使われる。半分に縦割りしてある。米はモミで貯蔵



左は野菜のプランター。
右は柱に。





←何故かフェンス代わりに使われる。保管してあるのか。



村の鍛冶屋。フィゴの送風は近代的。
農機具を制作したのであろうが、この施設があるから金属加工によって、したたかな廃物利用が出来たのではないか



村の小学校の風景。
左は校舎。運動場にはサッカーのゴールポスト。
遊ぶ子供たちの姿。



【プータイ族の村】



糸に撚りをかける。
右は小さな玉葱を選別する老婆、
100歳だと言う。



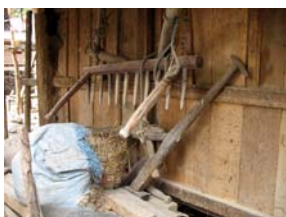
清流が流れる。野菜の洗い場になっている。
左下は流れが引き込まれ、水車を回して発電。
丸いタンクの中がジェネレーター。村の電灯をまかなっているとのこと。
優れた工夫。
流れのある村は何かにつけ、恵まれる



←ここでも酒造り。蒸留方法は同じ。



↑織物を持って売りに来る。捲きスカート
の裾に使うもの。色使い、デザインとも気に入ったものである。
40000Kだと言う。帰途に立ち寄る事にしたが、
帰路は別のルート。そのままになった。



←屋根をスレートに張り替え中

←鋤と代掻き用具。高床の下には耕運機が。

【タンピウ (Tham Piu) の洞窟】

ベトナム戦争当時、アメリカの戦闘機のロケット弾攻撃により、避難生活中の多数の市民が殺戮された洞窟。



平和を希求するラオス人民の記念碑的サイトとして、当局により管理されているようだ。

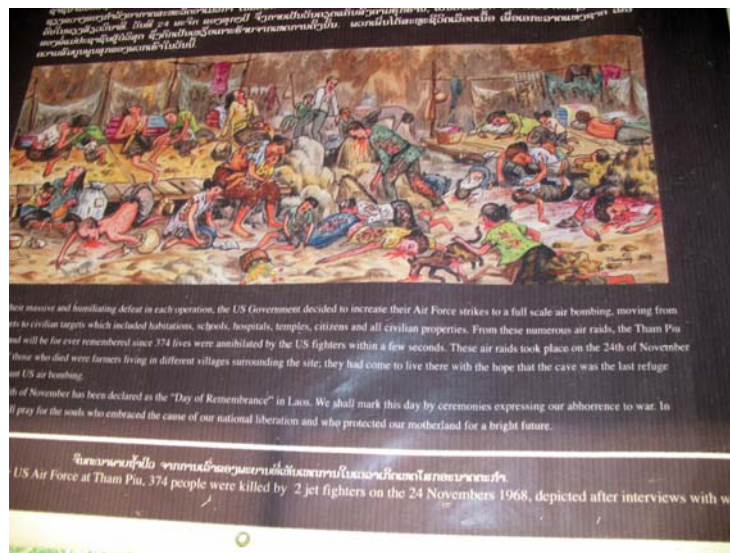
敵を明確にして、平和を求める国家意思の表明という意味があるのかも・・・このことにはあまり触れないことにしよう。

建物には2名の管理者、入口には子を抱く女性の象(例によって、芸術性に欠けるのが残念)



建物は履き物を脱いで入る。中には下の2枚の絵から始まって、人民軍の戦闘や悲惨な殺戮の状況、また、洞窟内の生活用品、遺骨などが展示されている。フラッシュの光の関係で展示品が鮮明でないのが残念。

少し、ニュアンスも含めて、忠実に英文に日本語訳を付けてみることにする。



↑彼ら(アメリカ軍)の作戦のそれぞれがことごとく、大量の人的被害と屈辱的な敗北をきつることにになり、アメリカ政府は空軍の攻撃を増加させることに決定した。住民の住居、学校、病院、寺、市民と市民の財産をターゲットにした全開状態の空襲である。これらの数えきれない空襲によって、米軍の戦闘機の攻撃にさらされ、数秒間で374の生命が全滅させられたタンピウ洞窟は永遠に記憶されることとなる。死んだ者はこの洞窟周辺の異なる村に住んでいた農民であった。彼らは、この洞窟はアメリカの空爆から逃れるための最後の避難場所として希望を持ってここに来た。これらの空襲は11月24日に実行された。

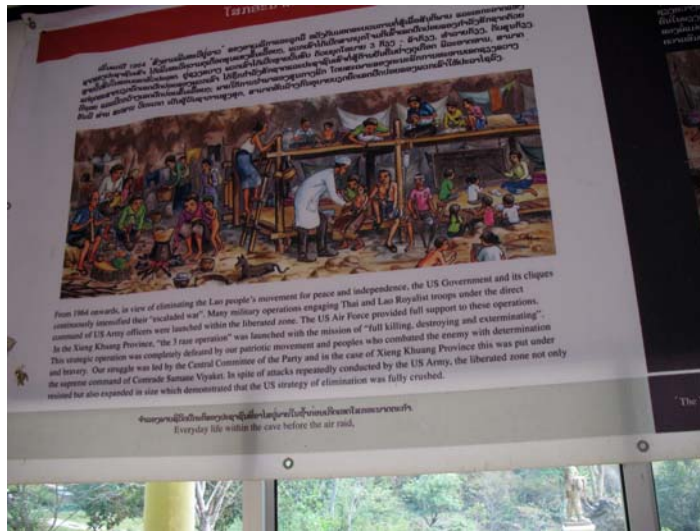
11月24日はラオスの「追悼の日」・・・忘れない日と訳するのが適当か(訳者)・・・として宣言された。

我々は戦争に対するわれわれの憎悪感を(戦争を忌み嫌い平和を希求する気持ち・・・前川註)表現する儀式によってこの日を印するものである。

彼らの魂は我々の国民の解放を生み出し、輝ける未来のために我々の母国を守ることになった。彼らに対して深い祈りを捧げるものである・・・そのことを抱きしめて彼らは死んだの意味・・・訳者註。

この絵は1968年11月24日、アメリカ空軍の2機の戦闘機によって374人が殺戮された。その時の生存者のインタビューから描かれたものである。

・・・抑揚を抑えた、事実に基づいたハードボイルドな名文であるだけに、心にせまるものがある・・・



1964年以降も、平和と独立に対するラオス人民の運動を無視して、アメリカ政府とその追従者は引き続いて、多くの軍事作戦をタイとラオス王国軍と連携させながら、しかも直接的にアメリカ陸軍の将兵の指揮のもとに、彼らの戦争のエスカレーションを強化した。そしてアメリカ空軍はこれらの作戦を全面的に空から支援した。

シェンクアンプロビンスにおいては、三つの「完全に破壊する作戦」が完全殺戮、破壊と絶滅の任務を負って実施された。

この戦略・戦術は我々の愛国的運動と決意と勇敢さをもって敵と戦った人民によって完全に打ちのめされた。

我々の苦しい戦いは党（人民革命党－共産党）中央委員会の導きを受けた。そして、シェンクアンプロビンスの場合においては、同志 SAMANE VIAKET の指揮のもとに戦われた。アメリカ陸軍の指導のもとに繰り返される攻撃にも拘わらず、解放区（Liberated Zone）は単に抵抗するにとどまらず、その区域を拡大させた。

これは我々を殲滅するとする彼らの戦略を打ち砕いたことの証明である。

・ . . . 此処に来て、英文は抑揚を抑えきれない、感情の高ぶったものになっている

このことについて、政府の意思表示に拘わらず、ラオス国民が如何なる感情で受け入れているのかが、興味あるところであるが、日本の我々の世代がベトナム戦争について持つ感覚とはいささか異なるアックラカンとしたところがあることを後日に痛感するはめにあうことになる。

我々の世代が広島・長崎について持つ感情と同じ感情をベトナム戦争と国の悲劇について、抱いているかに見える。広島島の原爆記念碑に刻まれている「安らかにお眠りください。あやまちは繰り返しませんから」との文章に象徴されるような、曖昧模糊たる平和概念。それに似たようなところがあることを感じる。

独占資本と軍国主義にアメリカがとって代わっただけで価値観の転換がない日本と、P. D. Rを樹立した国の国民である。自ずから、違う筈である。

タンピウ洞窟からの帰り道、サバイデイと挨拶を交わした女性の集団はラオス人であった筈だ。

それがラオス人であろうが無かろうが、ラオス人であったと信じたい。供養のロウソクを置いたのはラオス人と信じたいのだ。

この地が少なくとも、追悼の地になっていることを信じたいのだ。人民軍歴史博物館やカイソーン博物館ではラオス人は皆無の入館であったことと比較して

展示写真や物品の一部を紹介することとする。





撃墜された敵機の破片か、アルミニウムで敵機の形に作られた櫛。
→



人民軍歴史博物館やカイソーン博物館に展示されていたものと重複する写真もあり、またフラッシュの都合で画像が鮮明ではないが、説明文の一部を紹介する。

- ・ 同志〇〇と〇〇は敵の動向を聴き、抵抗活動を準備するため、シェンクアンプロビンスを訪問した。
- ・ アメリカの爆弾で傷つけられた僧や修行僧。多くの寺はアメリカの爆撃によって破壊された。
- ・ ラオス人民軍はシェンクアンのジャール平原の洞窟で活動している
- ・ シェンクアンプロビンスにおけるアメリカ軍の空襲によってできたクレーター
- ・ 軍の士官〇〇がアメリカ軍機を3発の銃弾で撃った。シェンクアンプロビンスなどである。



黒い穴が開く。入口の高さ約3M。奥行き2^{キロメートル}とも5^{キロメートル}とも言うが、よく判らない。夜は光が漏れるため、ロウソクの灯も使えない。

生活に必要なものは、なんでも揃えた。子どもたちに読み書きを教えた。病院の施設も揃えたとのこと。大規模な避難生活であったことが判る。左は放置された板きれであるが何故か、クロスに見える。水はこの洞窟から地下水脈になって大量が流れ出していた。現在は水路で引かれ、農業用水などに使われている。先に見た流れのある集落のように、周辺の山は水源になっているようだ。ただし、この水は飲料にならない。



← 供養のロウソクが入口の石に無造作に置かれている。



洞窟入り口まではかなりの傾斜の細い道が約300m続く。

青い札が見えるのは、犠牲者が発見された箇所。人数が書いてある。点々と青い札。逃げ惑う姿が想像される。



←入口を振り返る位置から撮影。後ろに見えるコンクリートの溝は水路。

洞窟の地下から流れ出す豊富な水。ラオス人女性のグループがサバイデイの挨拶をかわす。

入口から下方を望む。写真左上方の赤い屋根が管理施設。 →



←洞窟入り口から空を仰ぐ。この方向からジェット戦闘機が低空で侵入。ロケット弾攻撃。容易に照準を合わせやすい位置だ。

洞窟を離れ、チョットした街で車を停め、昼食。

政府関係の出先もあり、ムアンクーンの街と思われる。そうなら、シェンクアンプロビンスの旧県庁所在地である。メニューも複数あり、ライスに豚肉の生姜炒めをかけてものを食べる。これがなかなか行ける味。米も日本風で飯の感覚。

フィンランド人グループとテーブルを囲んで、少し、お互いのことを話し、会話。

60歳近いと思われる婦人はFAOの職員で4年、ピエンチャン在住とか。彼女がチリのFAO関係の知り合いとフィンランドの従妹を呼んで旅行中とのこと。ピエンチャン在住のFAO職員は2年前、国際会議に出席するため、京都を訪れたとのこと。京都の国際会議場で開催された農村婦人や生活改善などに関する国際会議とのこと。京都の観光ツアーにも参加し、エンジョイした。夏の京都は周囲が山に囲まれた地形のため、暑かった話題など。同行者がピエンチャン在住で農村婦人を対象に繊維の技術について訓練していること。当方が府県の農村開発、農林漁業、畜産を担当する職員であったことなどを紹介すると、それで、ラオス語を話すのかと納得。

同じ分野の仕事で、親近感が増したようだ。同じ行程で、本日シェンクアンからピエンチャンに行くとのこと。旅行社に追い立てられるようにして、次のポイントへ移動。

【ホットスプリング】

ここにも二人の村人が入場券をもぎる。・・・



写真のコンクリートで囲まれているのが泉源。硫黄の匂いもする。確かに熱い。50度位。
川に垂れ流し。麦わら帽子の女性が浸かっている箇所が適温。女性は日本からの観光客。
彼女とはシェンクアン空港で再会。同じ便でピンチャンへ。川には、河床の石で堰き止めが。子どもたちが水遊び。
のんびり。近くに、オーストラリア援助の観光客の休憩施設のような建物があるが、利用された形跡なし。



ホテルに帰着。VANSANA ホテルはラオス各地に展開する外国人観光客向けのホテル。
高台にある新築のホテルである。その下方には貧困（ごく普通の住居）が。ポールはフラッグ用。
玄関の温度計は30度近くを示す。今日も暑かった。
フロントでは同行者がランドリーの料金を巡って、従業員とやりとりしている最中。
1万Kで引き受けたものが3万Kを請求されたとか、アイロンがかけられていなかったとか。
フィンランド人グループは先に空港へ。

【シェンクアン空港】





ラオエアのポスター。路線図・オフィス所在地。バンコクにもあるが例の場所。ベトナム航空が乗り入れている。



中央政府要人の顔写真。サチによると何処にでも掲示されているとか。この感覚は理解に苦しい。



白紙に手書きの発着表



赤十字社の活動PRとドネイションボックス。



待合室の風景



←2006のワールドカップ
出場各国のイレブン

搭乗手続きカウンター →



またしても同型機現る。記念に撮っておこう。もしかして Lao Air の保有機は単数？そんなこともなからうが、使い回しのピストンかと思える。信頼性の極めて高い機体と言うことにしておこう。機はシェンクアンの大地を離陸、「大都会」ピエンチャンを再び、眼下に見る。ピエンチャン空港に着陸。40分の飛行。



ビエンチャン空港で、同行者の知り合いであるTさん（ラオス人）と「M」さん（ビエンチャン在住日本人）の出迎えを受け、投宿するチャンタパンヤホテルに送られる。チェックイン後、ラオス風焼き肉店で食事をとる。ジギスカン鍋のひさしの部分の彫りこみが深く、ここに薄味のたれを流し込み、野菜を煮る、ハットの部分で肉を焼く方式のものである。

牛肉を注文、このタンがなかなかの美味。日本で言うタンより小ぶりのものであるが、旨い。モンの村でよく見た、小型の牛のものではないかと思われる。何回もお変わりをすることに。

最初、「M」さんが会話をリードしたが、途中からTさんの男友達Kさんが同席することに。男友達と言うが事実上、生活を共にしている風である。

かれは、Lao Telecomの職員であるようだ。Tさんは地元の大学を終えて、ラオス郵政省（ラオポスト）の建築関係の技術職員ということ。日本語も少し勉強を始めていると言う。

いわば、ラオスの知識人階層の二人である。彼らのものの考え方などが垣間見え、大変、興味深い会食になった。

ラオピア10本を空にすることになる。

話のはずみで彼が「お父さんがラオスで事業を始めるときには、お手伝いしますよ」の発言があった。すかさず、「それは、ラオス人自身が業をおこすべきである」「苦難の歴史を思うとき、ラオス人自身が繁栄する権利がある」旨の発言をすると、何故か、男性が気色ばんだのが印象的であった。何故なのか、未だにわからない。

「もしものこと、その時にはのこを言っているのですよ」と「M」さんがことばを遮ったので、それ以上の会話にならずに終わったが、Tさんがポツリと「日本の広島とおなじですよ」の意味の発言をした。

この二人に明日はタイ国境まで車で送ってもらい、お土産まで持たせてもらうことになる。

車には、彼ら二人が育てている里子も同乗していた。



本日を最後に、農村社会から離れる。ここで、農村の印象を少し、包括的に補完しておきたいと思う。高床式の農家の居宅。床下や居宅周辺に鶏、アヒル、七面長、ハト、豚などのバラエティーに富んだ中小家畜、さらにバナナ、やし、サトウキビの食用植物、場合によっては綿の木などの工芸作物や自給用野菜作。こうした農家が5～6家族から大きな場合でも20家族までが集落を形成している。その集落の周辺には水田が広がっている。集落規模の大小は水が確保できる耕作可能な水田面積の大小によって決定されている。と言うのが一般的な農村集落形成であり、これが地域農業の生産の基礎的な単位になっている。

効率的な水利用が必要とされる水稲作を基本とした農業生産は他と無関係に個別経営が存立できない。

バンビエンからルアンプラバンにかけての山の地域は山での狩猟や採集、焼き畑のバナナなどの水を要しない畑作が中心になるところから少数点在の集落形成になるのだろう。実際、単独で住まいする住居もみた。

水田作を中心とする集落には必然的に共同体としての機能が出現する。灌漑水路の管理、共同利用の穀物貯蔵倉庫、村人総出の農家の建築の様子、田越しの灌漑方式、牛を買う者と水稲作を行う者の相互補完関係などが見られた。田植えや収穫作業など労働力が集中して必要な生産過程では労力調整機能があるのかな？雨季の農村もみてみたいものだ。

(土地の所有権や耕作権が如何なものか、中世から近世にかけての王国の繁栄を支えた産業は何であったのか、その徴税方法は、地主制は存在したのか、今、国家がどんな形でかかっているのか、農業の集団化を凶ろうとしたことがあるやに聞かぬが・・・これが重要なところだが、確かめられなかった。FAOのおばさんなら知っていたかも知れない。)

農業の生産性の確保のためには、個別経営の競争原理を基本として、不合理な生産過程は協同化・集団化が基本と思う。

酒造りや織物は原始において、各農家で自給的に行われていたものと思われるが、我々の感覚から言えば微少のものであっても、施設投資には、其れなりの資本蓄積が必要であるし、知識・工夫する能力などが必要なところから、分化して村の中において業として発展したのかも知れない。

我々が見た酒造りのビレッジ、織物のビレッジ、紙すきのビレッジなどはそれらが、ツーリズムと結びついて、これをビジネスチャンスとして活かすことによって、一層発展したものと考えられる。

こうした村に於いては、この経済活動から取り残された農家もあるように見た(単にそれらの者の住居が他と比較して粗末な事からの想像にしか過ぎないが)。こうして、観光地周辺では所得を求めてサービス業へ就労する農家婦人が出現していることなどもあり、同質的は農村集落のあり方が少しずつ変化を見せている。

おおげさに言えば、農民層の分解現象の始まりである。違う言葉で言えば競争原理の導入の始まりである。

逆に言えば、農業生産の場面においても、観光スポット周辺では小規模ながら商品生産農業の条件が生じている。その萌芽がみられる。(コーヒー生産は南部地域であるようだ。これも一度見てみたい)

集落が協同して(共同と協同は大きな意味のちがいがあ)これらの農業生産ができないのか?と思う。

中国の二の舞は踏む必要がない。Laos, P. D. R. である。中央政府の理念に基づいた指導性とそれを受け止めて展開する起業精神旺盛なオルガナイザーが求められる。人材育成が極めて重要な課題と感ぜられる。

農家住居周辺の畜産は驚愕に値する。多様な品目。そのすべてが在来種。いかにも粗食に耐え、病気には強そう、しかも食味は優れていると感ぜられる。豚の三角形の首輪の発想は優れた飼養管理方法である。

放し飼いにしながら、家畜の動線管理ができるなんて。しかし、生産性観点からは目を覆うばかりである。しかし、商品価値競争力観点からは付加価値になる。負けないものである。商品化する仕組みを作る能力があるかないかが問われる。

マーケティングとそれに対応する生産体制の確立である。

この地域は飢えることのない地域であるとの印象が強い。かつて、ベトナム戦争当時、しきりにメディアに流された映像に、北ベトナム軍の自転車部隊が荷台に糧末を振り分け荷物にして、南の前線に向かって、ホーチミンルートを下る様子が映し出されていたものだ。この糧末が自発的に解放軍に対する支援の証として提供されたものか、地域の農村集落から略奪したものかが議論になったことを思い出す。

アメリカ当局筋からは「北ベトナム軍は力で村々を共産化し、食料を略奪して、住民は飢えに苦しんでいる。」趣旨の喧伝がなされたものだ。事実、アメリカ軍当局はこの地域の農業生産力をミス判断していたのかも知れない。しかし、今認識するに、労働生産性観点からは、議論にもならないにしても、この農業生産体制は土地生産性においては、相当のものであることが理解できる。全ての農村地域で十分満たされているといえないにしても、地域によっては、自らの穀物を自給した上で、相当の余剰が出る筈である。

少々の状況変化では崩壊する農業ではないと感じる。しぶとく生き残る農業である。

解せないことがある。それは水である。石灰岩の山が保水して豊かに流れた地域は別にしても、乾季には十分な水が確保するのが難しい筈である。保水力を十分に有する森林にも見えないし、ましてや山に雪を抱える地域ではない。数百年にわたって農民的知恵(技術)の蓄積がなされている(と見える)。そのように農業をやって来ているにも拘らず、水については自然のなすがままとも言える状況である。それは、乾季にも水の流れる村落に於いても効率よく利用されているとは思えない。雨季の水はメコンが海へ運ぶだけである。人の手がかけられたファームポンド(日本のため池)のようなものを目にしたことは無かった。資本蓄積の脆弱性によるものか、土地の所有形態によるものか、他の理由によるものか、よく理解できない。ナムソン河には豊富な水量がある。雨季には有り余る水がある。灌漑施設を整備して水の確保をはかること。そして、その有効利用を図ること。これだけの蓄積された地域農業の生産体制がある中へ水が導入されると、それだけで地域農業は穀物などの土地利用型作物の土地生産性の増大に留まらず、商品生産農業への多様化を伴いながら飛躍的その生産力を拡大するものと思える。加えて、一層の生産体制の再編とマーケティング(都市部への人口集中の始まりと道路などのインフラ整備を見ると、その条件は生まれている)とそれを実現する起業精神に富んだオルガナイザーが地域のラオス人の中から出現することである。

- 8:00 起床。チャンタパンヤホテル。朝食。メニューから注文方式。昨夜の痛飲でいささか宿酔いぎみ。食欲なし。
- 9:00 ホテルを出て、同行者のバイクの後に乗って、Pさん宅へ向かう。
途中のガソリンスタンドで給油。リッター日本円換算で70円～80円。
新しいGSは、日本と同じ、飲み物があり、トイレがあり、休憩できる。
舗装道路を走ること約40分。
- 10:00 Pさん宅に到着。
父母、兄弟、子供が出迎えてくれる。
中華正月に使う菓子、ビアラオ、焼き魚（市民のマーケットでよく売られているセラピアの塩味の焼き魚・この村の食料品を売る店で魚を扱っているようだ）、モチ米の蒸したもの、ソム（生ハムのような酸っぱい豚の加工品、ビールによく合う）でもてなし。食べるよう勧められるも宿酔いにて食欲なし。
ビエンチャン郊外とも言える静かな集落の中。瀟洒な建物。ラオスでは水準以上の住居。小学校（本日は土曜日で休み）の横に住居がある。
近くに川があり、舟遊びが住民のリクレーションになっている模様。ビールを持ち込み、魚釣りなどをして遊ぶのが楽しみとのこと。日本に留学中の娘が日本語がうまくなるまでがんばらなきゃ。
父は軍に勤めている。本日は土曜日で休日とのこと。
子供たちが多く、誰彼の子供の区別なく、庭先で遊んでいる。家の中にも入っている。
- 10:45 Pさん宅においとまする。
市内へ帰る途中、カイソーン博物館に立ち寄るが、12時を少し過ぎており、Closed。
昼休みに入っている。2時から再開。
ひとまず、市内へ入り。タラートサオ（ラオス最大のショッピングセンター）へ寄る。
初日に見た壁掛けがここにあるとので探すが、見つからず。生鮮食料品以外のあらゆる商品が扱われている。食堂もある。市民や外国人ツーリストで賑わっている。
目的とするものが無く、市内の元の店に戻り購入。値下げ交渉にも拘わらず値切れず約20ドルで手を打つ。
コンビニ風の新しいタイプの店に入り、お土産を買う。店主はアメリカ人、このような新しい起業は殆ど外国人の手によること多い。ラオスコffeeをオーガニックと言ってしきりに推奨していた。来週には日本に行って、スーパーマーケットと取引の交渉をすとか。
- 14:00 カイソーン博物館に入館。
入館者誰もなし。守衛、切符のもぎり、館内の管理者などすべて手持無沙汰。館内はクーラーも無く、扇風機も回っていない。この暑さには閉口。落ち着いて見られない。
館内は写真厳禁。カバンを預けて館内を見ることになる。
王国時代のものも展示されており、古代から今日までの歴史が判るようになっている。が、中心はカイソーン元大統領の偉業を称える展示が中心。元大統領の生家の産声を上げた部屋が再現して展示してあるなど、個人崇拜の色合いが強いのが気になる。
ラオス共産党創立25周年を記念して2000年の建国記念日にリニューアルオープンしたと言う。
- 16:15 Tさんと例の男性(Kさん)が里子として育てている子供も乗せて、ホンダアコードでホテルに迎えに来てくれる。国境の町まで送るためである。
出国手続きをして国境を超え、バスでタイ・ラオス友好橋を渡り、入国審査の後、タイへ入国。ツクツクでタイ人と同乗して夜行列車始発のHONKHAI駅へ。
- 18:00 HONG KHAI 駅で HONG KHAI 発 BANGKOK 行列車に乗り込む。

約20車両を連結している。車両のクラス分けが明確になっている。我々のクーラー付き2名コンパートメント車両は機関車のすぐ後ろ、このクラスの車両は1両のみ。続いてファンの3段ベッド。クーラーの普通車、ファンの普通車、の順である。食堂車も連結。

食事はコンパートメントまで運んでくれる。フライドライス、コーヒー、ビールで1000程度。日本の駅弁と比較してもそれほど安価ではない。

定刻、18:20を約30分遅れで出発。

AYUTTHAYAは明朝、4時過ぎ到着予定。

夜9時頃、ベッドをセットに来る。眠りに入るが寝られない。禁煙だが、コンパートメントを出て、車両の乗降ドアの近くで喫えとのこと。



【カイソーン博物館】



【出国手続き風景】



【タイ入国審査を待つ】



【HONG KHAI Station】



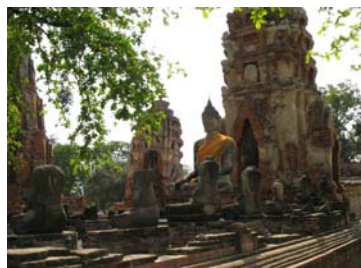


- 4 : 50 定刻より少し遅れてアユタヤ駅着。乗務員がコンパートメントまで到着を案内にくる。降車したのは我々と2人の外国人ツーリストのグループのみ。駅には数人の乗客が。早暁、暗闇の中の到着である。宿泊が確保できていなかった為、宿探しから始めることとする。駅にはこの時間でも2台のツクツクが・・・
駅にはホテルのインフォメーションは無い。駅員は英語が話せる。ホテル探しの方法を聞くと、ツクツクの運転手を紹介。
一旦断って、案内書を見て、電話をかける。が、早暁のため、まともに電話に出ず。応答があっても、満室とのこと。結局、駅員紹介のツクツクで宿探しにでる。
5か所を廻り、6か所目で、クーラー、トイレ、ツーベッドの部屋が空いているとのこと、しかしシャワーは水。
最初、日本人経営のゲストハウスへ、満室、空部屋がでるかどうかはチェックアウト時間以降でないとわからないとの対応。近くのゲストハウスを訪ねるが満室ばかり。高級ホテルなら空部屋があるとの想定のもとに訪れるが、タイ人観光客で満室とのこと。
土日のアユタヤはいつもこんな状態らしい。
ツクツク運転手の知っているゲストハウスへ行く、上質なゲストハウスで、クーラー、トイレ、温水シャワーの部屋が空いているとのこと、部屋を見るとワンベッドである。そんな経過があつて、結局、前述の水シャワーのゲストハウスをとりあえず確保して、一休みの後、チェックアウト時間を待って、再度、適当な宿を探すことにする。
ツクツクは40Bで乗ったが、走行距離、時間を勘案して、追加料金は?と聞くと。おまかせとのこと、100B渡すと、感謝の言葉あり。以外に信頼できる運転手である。
水シャワーで夜行列車の汗を流し、11時頃まで、眠ることとする。
- 11 : 00 荷物を置いて、宿を出発。まず、少なくとも温水シャワーの部屋をさがすこととする。
例の日本人経営のゲストハウスへ向かう。良質な部屋が空いているが、クーラーが無い。
クーラー付きのゲストハウスの紹介を受ける。また、午後4時からの船のツアーを紹介され、これに参加することを決定。3カ所のワットを舟で回って、夜のマーケットで下船するツアーとのこと。紹介されたゲストハウス、これも満室。
アユタヤホテル(中国系の高級ホテル)に空室があるとのこと。
訪ねると本館の他にゲストハウス並の安宿が別館としてある。これも空室ありとのこと。
ここを確保した。冷水シャワーとの価格差50B。それなりにバランスのとれた価格設定。
- 12 : 00 アユタヤホテル近くのデパートへ。カメラ用メモリーチップを購入するためと両替のためである。日曜日で買い物を楽しむ市民で混雑。両替の銀行は日曜日で閉店。遠方の大きな商業施設(Lotus)では開いているとのこと。
Lotus→2カ所のワットを見学(ワットマハタート、ワット・プラ・シー・サンペト)→冷水シャワーの安宿を引き上げ→新たに確保したアユタヤホテル別館に移動→午後4時からのツアーに参加→夕食の順のコースで今日一日の行動計画とする。
両替の銀行窓口は混雑のためATM機でVISAカードからパーツへ現金化。
レートは少し悪い、手数料がかかるがいとも簡単に現金化できる。カードを挿入、暗証暗号、希望のパーツ金額を打ち込むだけ。町中のいたるところにATM機。ラオスではピンチャンに1カ所のみとのこと。

アユタヤーはバンコクから北へ約80Km、チャオプラヤー川とその支流に囲まれた中州の街である。縦横に運河。
 1350年から17年間にわたり、アユタヤー王国が歴史を刻んだ。17世紀にはペルシャやヨーロッパ諸国とも外交関係を結んだ国際都市。度重なるビルマとの戦いを経て、1767年に陥落し、建造物の多くは徹底的に破壊しつくされた。町のいたるところに破壊された仏塔の遺跡が見られる。日本との関係も深く、16~17世紀にアジア近隣諸国をはじめヨーロッパからも商人が集まってきた。アユタヤー王はこれら外個人に住居を与え、町の建設を許可する。こうして出来た街の一つが日本人町。徳川家康の時代には御朱印船貿易で米え、800~3000人の日本人が住んでいたと言われる。その頭領が山田長政。

【ワット・マハタート Wat Mahathat】

高さ4.4mの仏塔があったと言われるが破壊された。木の根に取り込まれてしまった仏像、壊された仏塔のレンガ積み、頭部を落とされた仏像が残されている。圧倒的な量感で迫る。仏塔はレンガを積み、漆喰で表装して作られるものようだ。





【ワット・ブラ・シー・サンペット Wat Phra Sri Sanphet】

バンコクのワットプラケオに相当する王室の守護寺院。ビルマの侵略により破壊されたが三人の王の遺骨が納められる3基の仏塔が残った。





ワットブラシーサンパトに隣接してウイハーンブラモンコンボピットがある。高さ17mのボピット仏を本尊とする寺院とか。この寺院もビルマ軍に破壊されたが、ラーマ5世が再建し、1956年にはビルマからの支援も受けて礼拝堂が復元されたという。白と赤が基調の外観。

この周囲一帯は大観光スポットとなっており、内外からの見学者が絶えない。写真右側の通路には土産物店が軒を並べ、しつこい物売りで、マトモニ歩けない状態。インチキもある。



←街中には観光用の象のライディング

【ボートによるツアー】 三つの寺を川面から見て、船着場から境内に上がる。



←河や運河は重要な輸送路。砂利を満載した巨大なはしけがタグボートに引かれる。これが頻繁に運行されている。

【ワット・パナン・チューン】 中国系タイ人の信仰を集める寺院



【ワットブッダイサワン】





【ワットチャイワッタナーラーム】



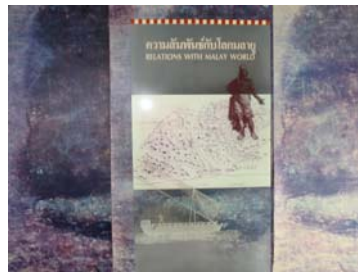
- 8:00 起床。宿を発つ。
 近くの写真機店でカメラのメモリーを購入。昨日のワットプラシサンペットの土産物店で買ったメモリーは不良品。
 そのあと、チャオサンプラー国立博物館を見学し列車でバンコクに行き、ジムトンプソンの家で買い物をする。バンコク国際空港を23:00に発ち、帰国の途に就く予定である。
 長い旅も本日で終わりを告げ、関西空港に明朝到着する。
 ツクツクにてチャオサンプラー博物館に着くが、何か様子が違う。
 本日は月曜日で休館とのこと。見ごたえのある博物館であるため、じっくり見学するつもりが、残念。もう一方のチャンタラカセーム宮殿(国立博物館)も同じく、月曜日休館とのこと。
 仕方なく、アユタヤ歴史研究センターを見ることとする。
- 9:00 歴史研究センターへ着く。朝早くて、展示室も鍵が開けられていない状態。我々の入館を待って、空調のスイッチが入れられる。
 1990年8月、王の還暦を記念して、日本援助により建設されたもの。ふんだんに模型を使ったり、映像で見せるなど、日本好みの展示手法で「王都」「港湾都市」「統治」「タイの生活」などが解説されているが、残念ながら見るべきものは無い。次いで時間に余裕があるため、「日本人村」を訪れる。
 アユタヤ歴史研究センターの別館としての位置づけの建物(これも見るべきものは無い)や日本庭園、併せて「山田家」(やまだや)と称する土産物店が商売をやっているが、この性格がよくわからない。
 日本人ツアーの観光コースになっているのかHISのツアーバスが立ち寄っている。
- 11:00 ホテルに戻り、荷物をまとめて、ツクツクにてアユタヤ駅へ。
 12:17発の列車が遅れ、本来は次の列車が、繰り上がって到着する。
 12:40に発車しバンコクファランボーン駅に14:30頃到着。
 駅の手荷物預かり所に荷物を預け、少し軽食を買って、駅待合所にて昼食。
 タクシーでジムトンプソンの家へ行く。
 16:25分から日本語で案内される。ジムトンプソンはブランドになっており、タイシルクを使った良質製品がショップに並べられている。少し土産を購入。
 ジムトンプソンが居住したタイ風のハウスはバンコクの街中では他を圧する落ち着いた異空間となっている。欧米人ツーリストが多数訪れている。
- 18:00 アセアンの会議の際、小泉も訪れたと言うソンプーン建興酒店にツクツクにて行き、上海カニ、シャコ、ビールで夕食。
- 21:30 バンコク国際空港に到着(タクシー)
 手続きして搭乗。23時離陸。明朝6時ころ、関西国際空港到着予定。

【アユタヤ歴史研究センター】





【アユタヤ日本人村・歴史研究センター別館】





【アユタヤー街中】



ツクツクが次第に減少しているようだ。タクシーにとって代わられているとか。凄まじい走り方が普通。



アユタヤーの街。かなり広い通りがバイクの駐車一杯の状態。月曜日であるがこの通りの歩道に屋台がのきを連ねる。人でごった返している。バアさんがココナッツミルク様のものを焼いて売っている。これがなかなかいける。30ヶほどが10B。いい稼ぎになる。この町の雰囲気はどこか、ローマの真町にている。喧噪と雑踏、暑さとタイ語、雑然としていて、にもかかわらず何かルールに基づいた人の動き、ギスギスしない。好感の持てる活気。



【真昼のアユタヤー駅】

英語の案内は全くない。タイ人の動きをみて外国人ツーリストは動く。ホームは一線だけ。線路から直接乗り込むことになる。



駅前の食べ物の屋台。同行者が焼き飯を買ってきた。安くて旨い。駅に向かってくる中国系タイ人



僧侶のための優先席。
使うな表示。車内販売のおばさん



【車窓風景】



耕作放棄されたと思える広大な農地が広がる。ここよりバンコクに近づくにつれて、こうした土地に工場進出が見られるようになる。



田舎町の駅（バンコクへ1時間程度）駅前風景は日本と変わらず。広場にバス。



【バンコク・ファランボン駅に到着】

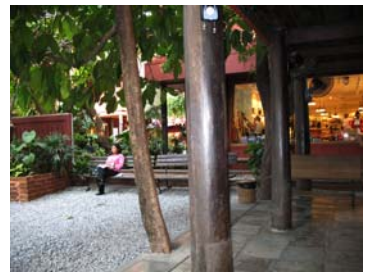
ファランボン駅は本線から少し入りこんだ袋小路。上野駅のような終着駅の雰囲気。





ジムトンプソンの家

ジムトンプソンがかつて住居としていた家。チーク材を使って建てられた古いタイ伝統様式の家屋6軒分を使い、組み立てなおして作られた。展示されている武術品は見るべきものが多い。古美術の発掘欲は並大抵のものではないと言われる。都心とは思えない静けさ。バンコクの異空間である。





ジム・トンゾンハウスにようこそいらっしゃいました。ジム・トンゾンは1906年生まれのアメリカー人です。第2次世界大戦前は建築家として働いていましたが、34才の時、アメリカ陸軍に志願して、ヨーロッパで従軍しました。第2次世界大戦の終了間際にOSSの情報将校としてタイに派遣され、退役するまでバンコクで勤務し、タイに永住しました。彼は家内産業であったシルクの手織りに興味を持ち、その普及に没頭しました。デザイナーとしても、染色家としても、天賦の才能の恵まれていた彼は、プリント模様のシルクを生み出し、その結果、タイシルクの名を世界的に広めました。

ジム・トンゾンハウスは、タイの古い建築様式を多く取り入れ、チーク材でできた家を6軒トル集めて造られたものです。大部分は100年から200年以上経っており、そのうちの何軒かはタイの古い都アユタヤから川を下って運ばれたものです。昔の建築法に従って復元しましたが、随所に彼の建築家としてのアイディアが生かされています。古い様式に従って中で、シャンデリアだけが電化されています。しかし、このシャンデリアも、18世紀ならびに19世紀のもので、すでに富裕な貴族の家にはありました。ジム・トンゾンハウスの建築にあつてはこの国の風習に従って占い師が必要な宗教上の占いを行いました。

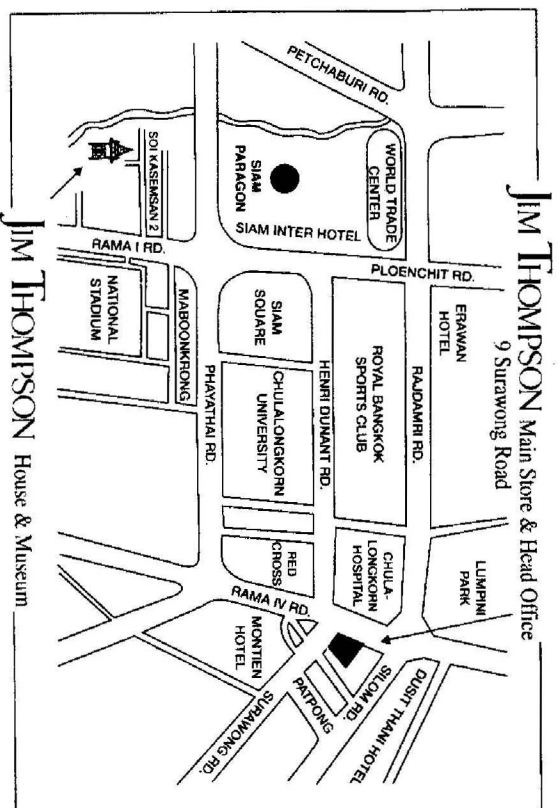
6番地 ソイカセムソソ 2 ラマー世通り バンコク

毎日 AM 9:00 — PM 5:00

この家は1959年の完成後まもなく一般に公開されました。展示品は昔のタイのもの場版でなく、周辺諸国の古美術品も含まれています。彼は1967年3月26日、マレーシアのキャメロン高原で休暇中、謎の失踪をとげましたが、いまだに手掛もつかめていません。

一般公開以来、ハウスの収益金はバンコクの盲学校の為につかわれています。尚、毎日日本語ガイドがおります。それに、毎週火曜日の午前中は日本人のボランティアがガイドを行っております。

1976年にジム・トンゾンの法定管財人はタイ王国の省庁からジム・トンゾンの名を冠した財団設立の認可を受けました。トンゾンの資産は財団の所有となり、その邸宅と美術コレクションは現在、私設博物館として公に登録されています。財団設立の際の認可状によって、財団はジム・トンゾンの永続的な権利を擁護し、タイの豊かな文化遺産の維持、保存のために貢献、専念するものです。





【後記】

thai—lao 2週間余の印象に残る旅であった。

旅行中、見聞きしたことについて、その印象を映像を交えながら、思い着くままに記したものである。

貧弱なこの地域に対する知識、加えて脆弱な洞察力である。

十分なものにはならなかったこと、折角の機会であったのに残念である。

印象記と言いながら、場合によっては、断言的に言い切っている部分がある。ご批判の上、ご教示いただければ幸いである。

なお、まがりなりにも、自分なりの印象をイメージとして形成出来たのは、現地語をあやつり、現地実情に通じる同行者、バンコク在住の家族に負うところが大きい。感謝申し上げます。

February 2007 Takuji Maekawa

【参考】 Vientiane Times の紙面より

Vientiane 滞在中の2日間の（一部は Weekend 版）の紙面から、印象を語るには、早計過ぎるが、この Paper の編集方針・紙面構成にはブレないものを感じる。ラオスの実情を踏まえ、新しい起業を鼓舞する視点である。しかし、英字紙であるだけに、外個人に対して情報提供してビジネスチャンスを紹介する役割を果たしているのかもしれない。

不発弾処理は進展している (Vientiane Times TUESDAY FEBRUARY 13, 2007)

先週、ヨーロッパの使節団が EU が資金提供した不発弾処理のプロジェクトの Khammuan や Savannakhet プロビンスにおける実施状況を見るために、報道陣を伴ったツアーを実施した。

このツアーの目的はメディアのメンバーに EU が2006年から2007年にかけて、Khammuan プロビンスにMAGを通じて100万ユーロを、Savannakhet プロビンスにHIBを通じて100万ユーロを資金援助したプロジェクトの進展状況を見せることである。

このプロジェクトは、人々が土地を農業や学校、道路に活用してラオスにおける貧困を削減するための一環として実施されるものである。

MAGによれば、2006年以降、29件の不発弾に関する事故によって、18人が死亡し、37人が負傷した。

これらは、残された家族に苦難をあたえることになる。犠牲者への対応に必要な資金が重荷になるし、農業経営体にとって無能な労働力を抱えることでマイナスの効果を与えるためである。

Khammuan プロビンスでは、MAGは Bualapha 地方の Langkhan 特別経済区と周辺の14のピレッジの新しい地域に焦点をあてて不発弾除去に努めてきた。

MAGのテクニカルマネージャーである Mr.Pascal の話によると、プロジェクトがスタートして以来、道路建設、病院やその他の建物用地を除いて、農地の約30ヘクタールが処理された。

最も多く使われたBLU26爆弾を含む16000のアイテムが除去された。

Savannakhet プロビンスでは、HIBは Sepon,Nong,Vilabouly の3地域に焦点を当てて取り組んでいる。この地域は、数千の爆弾がインドシナ戦争の期間中、特にホーチミンルートに沿って投下されたところである。いままでのところ、200800平方メートル以上が処理された。そのうち178000平方メートルが農地である。爆弾や地雷を含めて1550アイテムを破壊した。

このツアーの期間中、同行させたメディアの連中は爆破するために爆弾を探している現場を訪れることによって、どのようにしてこのプロジェクトがなされているのか、説明を受け、このプロジェクトの成果を目撃することとなった。

不発弾処理は必要な仕事であると考えられている。なぜなら、多くの村人たちは農業を発展させるために使える農地は限られてくるし、ごく普通の農耕の仕事にいくにも生命の危険にさらされているからである。

1965年から1973年の間にアメリカ空軍はB52に積載可能な爆弾の量に匹敵する数量の爆弾を9年間にわたって、8分毎に、ラオスに投下したことになる。その総量は二百万トンになる。そのうちの30%が爆弾としての機能が発揮できずに地中に埋まったまま残された。ホーチミンルートはラオスで最も激しく爆撃を受けたところである。

HIBのディレクターであるMr. Luc Delneuve はツアー中、次のように説明した。

「EUの資金援助は今年で終わることになっている。今後、EUからは資金援助は無いだろう。なぜなら、不発弾処理問題はラオスに対する計画的な戦略を構成する一部分にも入っていないからである。」

しかし、彼は、自分たちがこれまで受けてきたEUの支援の重要性について強調した。また、彼はEUや、さもなければ他からのさらなる資金援助の可能性がまだ残っていると語った。

さらに彼は付け加えて、「このプロジェクトは多くのコミュニティにとって重要であり、今後、5年あるいは10年間にわたって、もっと多くの仕事がまだ行われるべきである。人々に安全な土地を用意するために。」

UXO clearance makes progress



HIB crew carries a bomb for detonation in Savannakhet province.

□ VIENTIANE TIMES

THE European Commission last week conducted a press tour to view EU-funded unexploded ordnance (UXO) projects in Khammuan and Savannakhet provinces.

The aim of the tour was to show members of the media the progress of the projects for

which the EU has donated 1 million euros each through the Mines Advisory Group (MAG) in Khammuan province, and Handicap International Belgium (HIB) in Savannakhet province, from early 2006 to 2007.

The project is part of the process of poverty reduction in Laos, enabling people to have

land for agriculture, schools, and roads.

According to MAG, since 2006 18 people have died and 37 have been injured from 29 UXO-related accidents nationwide. This has created hardship for the remaining family members, due to the financial burden of victim treatment, cultural attitudes

towards disability and the impact on the agricultural sector.

In Khammuan province, MAG has focused on clearing a new site for the Langkhan Special Economic Zone in Bualapha district and 14 surrounding villages, and responding to community

CONTINUED PAGE 3

UXO clearance...

FROM PAGE 1

reports of dangerous items to be moved.

MAG technical field manager, Mr Pascal Blatto, said that since the start of the project, around 30 hectares of farmland have been cleared, excluding areas for road construction, hospitals and other buildings. Around 16,000 items have been removed, including many of the much-used BLU.26 bombs.

In Savannakhet province, HIB has focused on the three districts of Sepon, Nong and Vilabouly, where thousands of bombs were dropped during the Indochina war, in particular along the Ho Chi Minh trail.

So far, over 200,800 sq m have been cleared, of which around 178,000 are farmland, and 1,550 items have been destroyed, including bombs

and landmines.

During the tour, media workers were briefed about how the projects worked and witnessed the achievements of the projects by visiting sites where people were in the process of searching for bombs to detonate.

UXO clearance is considered a necessary task because many villagers have limited land available for agriculture development, and many fear for their lives as they go about the ordinary business of farming.

From 1965 to 1973, the United States air force dropped the equivalent of a B52 planeload of bombs every eight minutes for nine years on Laos, comprising over 2 million tonnes. An estimated 30 percent of the ordnance failed

to function and remains buried in the ground. The Ho Chi Minh trail was the most heavily bombed area in Laos.

HIB Country Director, Mr Luc Delneuve, explained during the tour that the EU funding was due to end this year.

"There will not be further funding from the EU because UXO is not part of the programme strategy for Laos," he said.

But he stressed the importance of the EU support they had received, and said there was still the possibility of further funding, either from the EU or from other sources.

He added that the project was important for many communities, and there was still much work to be done over the next five or 10 years to provide people with safe land.

小規模融資が開発を促進する (Vientiane Times TUESDAY FEBRUARY 13, 2007)

世界財団 (CONCERN DORLWDWIDE) は今年の財政規模 180 万ドル (2 億 1600 万円) を有している。来年度は 230 万ドル (2 億 7600 万円) をもって地方の開発を図ることとなる。昨日、ピエンチャンの「国際協力。訓練センター」において、「ラオスの貧困に対する小規模融資についての第二回の国の会議」が召集された。

2005 年において、2020 年までに最も遅れた低開発国の状態からラオスを脱却させる戦略の一環として、政府は、全国的に最も貧しい 47 の地方の人々に 20 億 5000 万 K を融通した。小規模融資の財源造成とこれに関する調査研究のプロジェクトは計画・投資委員会と世界財団が共同して進めてきた。

この共同プロジェクトは 2003 年から行われている。と、国立経済研究所の所長である Ms.Sirivanh Khonthapane が昨日の会議で語った。彼女はさらに、次のように語った。

「このプロジェクトの到達目標はこれらの資金を供給することによって、貧しい人々の生活条件を向上させることである。

現在では、僻地 (遠隔地) の人々を支援するために、政府、非政府組織や村落開発ファンドによる、多くの融資制度がある。小規模融資は貧困を削減するため、多くの国で採用されている手段である。

この会議の開催によって、政府機関と NGO などの他の機関の出席者がそれぞれの地域の現場における小規模融資計画の実施状況を報告しあったり、経験交流することが出来るようになった。」

彼らは、それぞれの地域における、その地域の地域性固有の貧困の条件に適切に対応するための手法について議論することとなるだろう。

「政府は小規模融資を行う事業体を国 (この場合、地方と訳す法が適当か・・・前川) の開発や一般的に貧しい人々を支援する手段として重要であると認識している。」と Lao P.D.R. 銀行の副総裁である Mr.Bounsong Sommalavong は語っている。

世界財団はラオスの最も僻地に於いて、数多くのプロジェクトに係わってきた。と財団機構の国家 (この場合、地方と訳すべきか・・・前川) 主任補佐であり、小規模融資のエキスパートである Mr.Plash Bagchi は語っている。彼は付け加えてさらに、次のように語った。

「最近の財団の融資計画においては、最貧の人々や最も僻地の人々の生計 (暮らし向き) に応じて、担保徴求の必要性について大いに申し上げる方法を探らなければならない状況である」

(seek to address~と言う大変、遠慮勝ちな苦しい言い方になっている。・・・前川)

「このことは、集積された地域開発プロジェクトや最も必要性の高い健康対策の増進を長期にわたって成し遂げることによって、解決が可能な問題である。

そして、調査研究 (事前調査と融資後の経営指導を含まなければならない・・・前川) とそれに基づく開発を実施することによって、政府の小規模融資の実施機関が許容能力を増大させる事が出来るようにサポートすることが重要である。(許容能力とは端的に言って、長期にわたって債権が回収できない状態に耐えうる能力のことと理解する・・・前川)

一方、社会的機構が許容能力を増大させるよう政府を支援しなければならない。

財団の活動は 7 つの最貧地域のうち主に、Bokeo, Savannakhet, Huaphan のプロビンスで活発に展開されている。Mr.Bagchi はさらに次のように説明した。「小規模融資と社会機構開発プロジェクトは今では全国においてその取り組みが見られるようになった。これは、小規模融資が貧困と闘う最も強力な手法の一つであることを示す証しである。」小規模融資は信頼と尊敬と自己尊厳を助長することができるものである。そして、貧困家族の全体的な信頼を増進させるものである。小規模融資は実施に当たっては手法を工夫しなければならぬ手段である。それは、直ちに実施できる活動ではない。また、対症療法的な薬物にはなりえない。それは、貧困という症状よりも貧困が起る原因をターゲットにするものである。

Notice
Vientiane Times provides news updates twice daily at 11:00am and 5pm on our official website: www.vientianetimes.com
For all information on events and developments being done throughout Laos, please subscribe to our e-mail address: news@vientianetimes.com

Vientiane Times

The First National English Language Newspaper

TUESDAY FEBRUARY 15, 2007

Page 57



Microfinance to boost development

□ VIENTIANE TIMES

CONCERN Worldwide has a microfinance budget of around US\$1.8 million this year, with next year's set to exceed US\$2.3 million for rural development.

The 2nd National Meeting on Microfinance for the Poor in Laos convened in Vientiane yesterday, at the International Cooperation and Training Centre.

In 2005, the government released loans of about 25 billion kip to people in the 47 poorest districts nationwide, as part of the strategy for Laos to advance from least-developed country status by 2020.

The Microfinance Capacity Building and Research Project is being jointly implemented by the Committee for Planning and Investment and Concern Worldwide. This collaboration has been ongoing since 2003,

said the Head of the National Economic Research Institute, Ms Sirivanh Khonthapane, at yesterday's meeting.

She added that the goal of the project was to improve poor people's living conditions by supplying them with loans.

At present, there are many loans to help people in remote areas, from the government, non-government organisations and village development funds.

Microfinance is one way to help reduce poverty and has

been employed in many countries, Ms Sirivanh explained.

She added that the meeting would allow government and representatives of other organisations to report on the implementation of microfinance programmes in their respective areas, and to relate their experiences in the field. They will discuss methods appropriate to the conditions of poverty in each locality.

The government sees the

importance of developing the microfinance sector as a tool to help in the development of the country and to assist poor people in general, said the Vice Governor of the Bank of the Lao PDR, Mr Bounsong Sommalavong.

Concern Worldwide has engaged in a number of rural development projects in the most remote areas of Laos, said the organisation's Assistant Country Director and

CONTINUED PAGE 3

Microfinance to...

FROM PAGE 1

Microfinance Expert, Mr Palash Bagchi.

Mr Bagchi added that Concern's current programmes largely seek to address the livelihood security needs of the poorest and most remote populations. This could be achieved through long-term integrated rural development projects, improvements in health services for those most in need, and support for the government's capacity enhancement in the microfinance sector through

research and development, while assisting the government to develop the capacity of social organisations.

Concern's operations are mainly concentrated in Bokeo, Savannakhet and Huaphan provinces, in seven of the poorest districts, he said.

Mr Bagchi explained that microfinance and social organisation development projects are now found throughout the whole country.

"This has proved that

microfinance is one of the strongest tools for combating poverty," he said. Microfinance can foster confidence, respect and self-reliance, and improves the overall dignity of poor families.

"Microfinance is a technical instrument. It requires proper design, attention, and strong supervision. It is not an immediate action or curative medicine; it targets the root causes of poverty rather than the symptoms," he said.

ワークショップは食糧の安全保障について呼びかけている（提案している）

（Vientiane Times TUESDAY FEBRUARY 13, 2007）

4カ国からの出席者が第二回目のワークショップに、Vientiane に集まり、地方の食糧安全保障（食料自給のこと）と農業（農場経営）開発プログラムについて議論した。

農業林業省の次長、Mr.Xaypladeth Chounlamany は「このワークショップの目的は、参加各国における食糧安全保障の進展度合い（到達点）について、議論することにある。」と語っている。

バングラデシュ、スリランカ、インドネシアとラオスから出席した60～70名の参加者は参加各国においては、この問題については、同質的な条件のもとで似通った対策を進めていることを認識しあい、それらの対策の効果を考察するために、Vientiane に集まった。

第一回目のこの地域の食糧安保に関するワークショップはインドネシアで階差された。目下進行中の「南と南の共同関係を通じての食糧安保に関する特別の計画（SPFS---SSC）」を進める一環として開催されたものである。

「或る国の対策が必ずしも他の国に直接適用できるものではないかもしれないが、新しいアイデアを生み出す刺激剤になるものである。」ことを参加者たちは認識することが出来た。

各国は新しいテクノロジーや人的な、経済的な、社会的な、政治的な、環境的な利益とそのコストについて報告した。

Mr.Xaypladeth は、また、次のように話している。

「これらのワークショップの他の大きな目的は、この4カ国のそれぞれにおいて、新しい食糧安保戦略に貢献するような、もっと大きな規模での食糧安保に向けての活動の可能性を開拓することにある。

これらの4カ国に敬意を払って、立ち返って考えて、参加者たちは、食料安保のために、技術の問題だけでなく、資金や制度上の問題、さらに人的資源の問題についてさらに議論することになるだろう。

インドネシアとラオスとスリランカの間において食糧安保計画の連携について議論が進んでいる。」

ラオス国の食糧安保計画に係る部局の次長である Dr. Somnuk Thirasck は次のように語った。

「4カ国における SPFS---SSC のプロジェクトは終了段階に差し掛かっている。

今は、それぞれの異なるアプローチの中で、何が達成されたのかを総括し、将来に向かって、如何に、前進させるかを指し示す時である。

ここにきて、国連の FAO はラオス政府と共同して、2月12日から15日にかけて、ワークショップを組織して実施した。

Dr. Somnuck は語った。

「今日まで、SPFS---SSC のパイロットプロジェクトは世界レベルで105以上の国において実施されてきた。FAO は日本政府の資金、技術の両面の支援を得て、2001年の会議に参加した4カ国に於いて最初のパイロット的な活動を立ち上げた。

国民の食糧安保（食料の自給）は、発展途上国においては重大な開発達成目標の一つである。人的資源の開発や人間の尊厳と統治能力を強化するにあたって、それは基本的な必須条件であることを、指し示すものである。

SPFS---SSC は貧困なコミュニティが持続可能な食糧資源を開発するにあたって、地方行政機関と協力共同のもとに、それらの開発努力を鼓舞するように制度設計されている。

その計画は地方当局がその地方の食糧安保（食料自給）計画を履行する能力を高めることになるものである。複数にわたる統制（規制）が採用される。その結果、開発はコミュニティに基礎を置くべきであるとする原則と巧く調整しながら新しく革新的なテクノロジーを地方の制度の中に持ち込むことができるようになるのである。

そのプロジェクトは農民の現地における学習機会や農場のグループとしての開発計画や資金の循環を引き起こすことになるものである。SPFS---SSC によって紹介されたこれらの手法は地方政府にとっては新しいものであるが、市民社会においてはお試し済みのものである。

Notice
Vientiane Times provides news
coverage twice daily at 11:30am
and 5pm on our official website
http://www.vientianetimes.com.la
For all information on events
and developments taking place
throughout Laos, please
subscribe to our e-mail service
by clicking on the link below
http://www.vientianetimes.com.la



Workshop addresses regional food security

□ PHAISYTHONG CHANDARA

REPRESENTATIVES from four countries gathered for a second workshop in Vientiane to discuss regional food security and farm development programmes.

The Deputy Head of Office of the Ministry of Agriculture and Forestry, Mr Xaypladeth Chounlamany, said the objectives of the workshop were to debate the food security approaches followed in the participating countries.

The 60-70 representatives from Bangladesh, Sri Lanka, Indonesia and Laos met to identify sound and replicable practices in their countries, and to examine their impacts.

The first regional workshop on food security was held in Indonesia, as part of the ongoing Special Programme for Food Security through South-South Cooperation (SPFS-SSC).

The participants recognise that practices in one country may not be directly applicable to another, but may stimulate new ideas. Each country has documented new technologies and best practices including their human, economic, social, political and environmental benefits and costs.

Mr Xaypladeth said that another major goal for these workshops is to explore the possibilities of up-scaling food security activities in each of the four countries, including contributing to new national food security strategies.

On returning to their respective countries, participants will further discuss funding, institutional and human resources, as well as technical constraints, to food security. There are on-going discussions about the implications of a regional food security programme in Indonesia, Laos and Sri Lanka.

The Deputy Director of Laos's National Programme for Food Security, Dr Somnuck Thirasack, said the SPFS-SSC projects in all four countries are now approaching their end. It is now the time to assess what has been achieved, to compare the different approaches and to suggest how to proceed in the future.

To this end, the UN Food and

Agriculture Organisation (FAO) organised the workshop in collaboration with the government of Laos, from February 12 to 15.

Dr Somnuck said that, to date, the SPFS-SSC pilot projects have been implemented in over 105 countries worldwide. FAO set up the first pilot activities in the four countries attending the meeting in 2001, with financial and technical support from the government of Japan.

National food security is one of the major development objectives in developing countries. It addresses the basic requirements for improving human resources and for strengthening human dignity and sovereignty.

The SPFS-SSC is designed to empower poor communities to develop sustainable food sources, while participating and collaborating



Dr Somnuck Thirasack speaks at the workshop.

with local governments.

The programme is also intended to improve the capability of district level authorities to implement local food security programmes.

Multiple disciplines are employed in bringing new and innovative technologies to local institutions, accommodating the principles of community based development. The projects have set up farmer field schools, farm-group development plans, and revolving fund systems. These methods, introduced by SPFS-SSC, are often new for local governments, but are time-tested in civil society.

地方の食糧安保（食料自給）は発展している（Vientiane Times TUESDAY FEBRUARY 13, 2007）

全ラオスの家族たちは SPFS のサポートを受けて、貧困から脱出するために、懸命に働いている。

このプロジェクトは Borikhamxay, Champassak, Luang Namtha, Oudomxay, Vientiane のプロビンスに於ける8の地域の10のビレッジで実施されてきた。計画は最初から灌漑システムを改善することに焦点が当てられてきた。農業生産や穀物、畜産の生産性を向上させるための水を用意するためである。それはまた、農民たちが養魚場を増やし、とりわけ、例えばゴムのような商品になる樹木を植林することによって林業生産を拡大することに大いに役立った。

それはまた、賦存する資源（農地に使える土地のこと・・・前川）の生産力を増強する簡単な手段になることを農民に教えることになった。そして、農業生産物の貯蔵期間の延長とそれによる市場販売を拡大するプロセスをどのようにすればいいのかを学ぶこととなった。

プロジェクトは村人のために資金を用意した。村人は簡単な償還計画（無利子）を提出し、承認されると融資（ローン）を受けることができる。ラオス政府によって信用保証され、2001年にその運用が宣言され、国の専門家に運営いたくされて、最初の5年間は資金規模は260万ドル（ラオス政府からは100万ドルが拠出された）である。

この制度は、さらに1年間、この5月まで延長されることとなった。日本政府から27万5千ドルの追加の財政措置を受けて延長されることとなった。政府やFAOやベトナムのSSCの専門家や農業技術者の技術援助を受けて運用される。

計画はこのプロジェクトが実施される地域の全ての人々が確実に食糧を手にする事が出来ることを保証することに狙いを定めた政府の理念や戦略をサポートするものである。

穀物生産の単位面積当たりの生産量の増大や農業生産体制の多様化が成果となって現れる。

プロジェクトは農業生産を拡大したいと願っている農民を支援するために、その地域の実情に合わせて活動できるもっと多くの技術力のある専門技術者や資格のある適任者を用意することになっている。

関心のある農民は新しい農業技術を学び、新しい栽培技術や家畜の飼養管理に入っていくことになる。

これらの成果は農業生産や家族収入の水準を向上させ、農家世帯段階での食糧安保（食料の確保・・・前川）を増進させることにつながる。

さらに言えば、農民たちは自然からの資源を効率的にそして持続的に管理していくことが可能になり、同時に、プロビンスやディストリクトの職員スタッフの能力を掘り起こし、彼らの仕事をもっと改善されることになる。

Vientiane プロビンスの Hinheup 地方の Khonkeo ビレッジの住民である Mr.Phonexay は次のように話している。「牛や水牛の多くの飼養群（飼養頭数）は、このプロジェクトの支援を受けて以降、毎年、5% ずつ増加している。」

Notice
Vientiane Times provides news
updates twice daily at 11:00am
and 5pm on our office website:
<http://www.vientianetimes.com.la>
For all information on events
and developments taking place
throughout Laos, please
subscribe via our e-mail address
to receive PDF or HTML files
info@vientianetimes.com.la

Vientiane Times

The First National English Language Newspaper

TUESDAY, FEBRUARY 15, 2007

Page 57



Rural food security improves

□ KHAMPHONE SYVONGXAY

FAMILIES throughout Laos are working hard to escape poverty with support from the Special Programme for Food Security through South-South Cooperation.

Projects have been implemented in 10 villages in eight districts in Borikhamxay, Champassak, Luang Namtha, Oudomxay and Vientiane provinces.

The programme is primarily focused on improving irrigation systems to provide water for agricultural production and improving crop and livestock productivity.

It also encourages farmers to propagate nursery and forest products, especially through planting commercial trees such as rubber. It also teaches them simple ways to develop fertilisers from existing resources, and how to process agricultural products for an extended shelf life and market sale.

The project provides funds for villagers who receive loans granted on simple repayment plans and accruing no interest.

Endorsed by the government of Laos and declared operational in 2001, a team of national experts ran the initial five year programme, with a total budget of US\$2.6million including contributions from the Lao government amounting to US\$1million.

It has now been extended for one more year with an additional budget of US\$275,000 funded by the government of Japan, and terminating in May of this year.

Technical assistance is provided by experts and field technicians from the government, the FAO, and officials from the South-South Cooperation of Vietnam.

The programme supports policies and strategies of the government aimed at ensuring all people in the target project areas have reliable access to food.

Outcomes include increased crop

yields per unit area and a more diversified agricultural production system. The project provides more qualified and skilled technicians at the district level to assist farmers who wish to increase their agricultural production. Interested farmers learn new techniques and are introduced to new cultivation and husbandry technologies.

These outcomes increase farm production levels and increase family incomes, leading to improved food security at the household level.

Furthermore, farmers are more capable of managing natural resources effectively and sustainable, and the capacity of provincial and district staff, as well as farmers, to perform their work is improved.

A resident of Khonkeo village in Hinheup district of Vientiane province, Mr Phonexay, said that the numbers of large livestock such as cows and buffaloes are increasing up to five percent every year after receiving assistance from the project.

モン ミュージックのビデオショット (Vientiane Times TUESDAY FEBRUARY 13, 2007)

大きな木の木陰の下で、男女の若者がベンチで一緒に座っている。

女性はシャイなようだ。一方、蒙の言葉でしゃべっている男性は彼女ときっかけをつくろうとトライしている。

蒙の人たちにとって、こうしたロマンスがらみのシーンはまれなことである。

アメリカに基礎を置いたコミュニティビデオのプロデューサーである Mr. Neej Tshab にアメリカからラオスまで来て彼の制作するミュージックビデオのための蒙の若い女優と歌手を探すために、長い旅をする気持ちを起こさせた。

日曜日のインタビューで彼は語った。

「ラオス文化の販売促進したい。ことに、蒙族の文化をである。それで金儲けしようとは思わない。ラオスには才能のある人々がいる。また、それだけで訪れる価値のある美しいところがたくさんある。ミュージックビデオを撮るためにラオスへ来たのはこれが最初である。必要な長さのビデオを撮ってミネソタに帰り、編集して最終製品のミュージックビデオにして販売することになる。これによって大金を儲けようとは思っていない。

Mr. Neej はラオスで生まれアメリカで育った。ミネソタには蒙族の大きなコミュニティがある。多くの若者が居り、彼らは、若い蒙の人たちがラオスではどんな生活をしているのか知りたがっている。

ラオス文化を広めるためにビデオを作りたい、そしてアメリカにおける彼の属するコミュニティで

ラオスに対する良い感情が広がっていくことが望みである。我々のコミュニティの人々が見てみたいと思うような美しい場所を私はラオスで見つけた。それが、私がビデオを作るためにここに来ることを選択した理由である。アメリカには無い多くのものがここにはある。彼はこう説明してくれた。

彼はここで、主に若者の生活をテーマにした3~4曲を録音する計画である。たとえば、一人の少年がひそかに一人の少女を愛している。その彼は多くの蒙の人々を愛している。また、彼はそのことを彼女に話せないほどシャイである。と言ったような曲である。若者がピエンチャンの通りをバイクに乗っているようなシーンや多くの蒙族が住ましている地方の居宅などの映像を使って音楽を表現したい。

彼は大きな蒙族のコミュニティである Vientiane の Xaythany デイストリクトの Thadindaeng ビレッジで出演女優を探すことが出来た。それらの多くは彼の親戚である。だから、ボランティア出演のようなことで彼を助けてくれたとのことである。彼らの幾人かには、撮影に先んじて演じてくれる謝礼に何がしかのチップを渡した。音楽は多くの人々にアピールするかどうか確信が持てない、しかしながら、将来にわたってこの仕事が発展するように、この音楽を聞いたなにかがしかの人々が反応をしめしてくれることを期待している。

男優として出演してくれた一人がピエンチャンのサロンサイガーデン (salongxay Garden) にビデオ撮影のために集まってきた。蒙族の歌手としてこの録音で役割を演じてくれたことを幸せに感じている。

そして、アメリカの蒙の多くの人々が彼の才能を見てくれることを期待している。

彼は自分を人々にアピールするため、自ら作曲してくれたものである。

このように、Mr. Neej は説明してくれた。

Hmong music video shot

□ EKAPHONE PHOUTHONESY

UNDER the shadow of big tree, a boy and a girl sit together on a bench. The girl looks shy, while the boy, speaking in Hmong, tries to flirt with her.

For Hmong people, such a scene of romance between young Hmong people is rare, a fact which inspired a US-based community video producer, Mr Neej Tshab, to make the long journey from the US to Laos in search of young Hmong actors and singers for his music video.

"I am trying to promote Lao culture, and especially Hmong culture, but without trying to make lots of money from it," Mr Neej explained in an interview on Sunday. "In Laos, there are many talented people and many beautiful places, which have made it worth the visit."

He said this was the first time he had come to Laos to shoot a music video, and he plans to take the footage back to his home in Minnesota in the US to be edited, before trying to sell the finished product.

"I don't think I'll make much money from this," he says.

Mr Neej, who was born in Laos but grew up in the US, explained that there was a large Hmong community in Minnesota, including many young people who wanted to learn how young Hmong

people lived in Laos.

He said he wanted to make a video to promote Lao culture and create a good feeling about Laos within his US community.

"I have seen a lot of beautiful places in Laos that our people would like to see, and that's why I chose to come here to shoot the video. There are so many things here that we don't have in America," he said.

He plans to record three or four songs here, mostly about the lives of young people. In one song, for example, a man secretly loves a girl, but like many Hmong people, he is too shy to talk to her.

He uses other scenes of Hmong life, such as riding motorbikes in Vientiane streets, and the distinctive houses that most Hmong live in.

Mr Neej found most of his actors in Thadindaeng village, Xaythany district, Vientiane, where there is a large Hmong community.

"Most of them are my relatives, and so have volunteered to help me," he said, adding that he had to give some of them some acting tips

before they started shooting.

He is unsure whether the music will appeal to many people, and hopes that some of his audiences will give him feedback so that he can improve his work in the future.



First-time actor, Ms Dexong.

One of the actors gathered at the Salongxay Garden in Vientiane for the video shooting, Mr Beeja, said that as a Hmong singer, he was happy to have a role in this recording, and hoped many Hmong people in the US would see his talent.

He composed the music by himself, to appeal to people his own age.



Actors pose for a snapshot after the making of their video.

有機農業に取り組む農民が自分たちのビジネスが開くのを待た。

(Vientiane Times SATURSDAY, FEBRUARY 24, 2007)

有機農業のプロジェクトは今年末までに、150の農家がこの事業に参加することになる。そして、彼らのショップで売るに十分なだけの生産が出来るよう期待が集まっている。

このプロジェクトは今では、ピエンチャンの Sikhottabong, Xaysettha, Xaythany, Hadxaifong のデイス トリクトの5つのビレッジの46の農家がこの事業に参加し、働いている。数年前に3農家で始めたもの であるが、大変な増え方である。

この「有機農業と市場開拓プロジェクト」の推進共同責任者である Mr. Phouvong Chittanavanh は「我々 に生産物を供給してくれる農家ももう少し増えれば、年間を通じて販売するに必要な量の野菜を確保する 事が出来る」と話している。

各農家は3200から9600平方メートルの農地で人工肥料（化学肥料）や農薬（殺虫剤）を使わず に作物を栽培している。栽培品目はレタス、キャベツ、玉ねぎ、にんにく、とうがらし（チリ）、にんじん、 メロン、まめ、トマト、ローカルフルーツである。

このプロジェクトは恒常的に出荷できる市場（ラオスではタラート）をの他に、彼らの有機農産物の販 売促進のために野菜ショップを開くことを計画している。

「我々は Chanthabouly デイス トリクトの Thongkhankham Market（ピエンチャンで見たタラート・ トンカンカン）に店を持っている。しかし、野菜がコンスタントに常時供給できる体制にない。」と先の Mr. Phouvong は語っている。

ショップの開店によって、毎日、有機栽培野菜を売ることが出来る。しかし、これも安定した供給体制 はとれない。たとえば、ショップにはレタスとキャベツは十分な量があるが、ニンジンと豆は少しかな いと言ったようなことである。また、あるときには、トマト、と玉ねぎ、にんにくは多量の供給量がある が、トウガラシとメロンは僅かしかないと言ったようなことである。

「我々がすべての生産品目にわたって安定した出荷が出来るときには、ショップの前に新しい宣伝を掲 げなければならない。」とショップアシスタントの Mrs Duangta は語った。

このプロジェクトから、有機栽培の技術を教えられた。また、収穫物は毎月集めるようにして、農家が継 続して安定的に作物を栽培するように激励して奨励しなければならない。

「我々は、今のところ、農家の出荷量を推定しなければならない。そして、各栽培品目にわたって定時、 定量的な安定した供給が出来るようになるまで、何としてもこの計画を続けなければならない。」と Mr. Phouvong は話している。

さらに彼は続けて、「有機農業は無精者の農家には向かない。」とも語った。

安定した供給が確保出来るようになった時には、野菜のパッキングはそれぞれのビレッジで責任を持っ て実施することになる。そして、生産物は「有機」Organic とラベリングすることになる。

「我々は、また、生産物をスーパーマーケットやミニマートで販売することを目標にしている。」とも語 っている。

彼は農家が仲買人の段階をカットして直接に生産物を小売商に卸すことを援助したと考えている。その 場合、自ずと価格を引き下げなければならない。

有機農業は、生態系の内部で生態学的な相互作用を管理する必要がある。化学肥料や農薬（殺虫剤）を 使わずに作物を栽培しなければならない。そのために地力を増進させ、作物の健康状態を維持し、害虫や 病気の大規模な発生から守らなければならない。などの課題が生産体制の中に提起されるものである。

有機栽培に取り組む農家は化学肥料や農薬（殺虫剤）を排除するよう努めている。化学物質は環境や人間 の健康、農地を長期間持続可能な状態にして置くこと、また土地生産性を維持し続けることに、悪影響を 与えるためである。Xaythany デイス トリクトの Nontae ビレッジの Mr. Bounnhong phomdoktan は次の ように話している。「有機農業を3年前から始めた。それまでは、化学肥料や農薬の使用によって害を受け ていた。しばしば、胸が締め付けられるような感じになり、大変な咳をしていた。そして、口にする食物 の味が判らなかった。そんな、症状が出ていた。主治医は私が化学物質に対するアレルギーを患っている

と言った。1974年以来、長年にわたってそれらの化学物質を使っていたのである。」

今日、彼は農場の副産物である家畜のかいば（飼料）や排泄物、コンポスト、モミガラやわら等のリサイクルから自然の肥料と殺虫剤を作っているのである。

彼は、もはや、化学物質に金を浪費することは無い。有機生産物の価格は化学物質を使って栽培したものとそんなに変わるものではない。たとえばレタス12キログラムの生産費は2万から4万Kである。

私の生産物が有機栽培であることを信じられない取引業者もある。なぜなら、化学物質を使って栽培されたものと、同じくらい良いものであるからである。彼はバラエティ豊かに野菜を育てている。トマト、豆、メロン、とうがらしなどである。他のマーケットの園芸家 Ms Noy は「彼ら農家は今では自家採種の種を使っている。これまでは輸入種をつかっていたのに。」と言っている。

Ms Noy は異なるタイプの野菜を彼女の農場で栽培している。彼女が最も気に入っているのはレッドレタスである。有機肥料や殺虫剤を作るのに1週間ほど時間がかかる。自家製の殺虫剤は3か月以内に散布される。さもなければ、効力が失われる。有機栽培は収穫するに十分な程度に発育するにはより長く時間がかかる。例えば、化学物質では約20日で成熟するが、有機栽培の場合は1週間ほど遅れる。

それらは完全に品質の面で異なる。化学物質で生育した野菜は1～2日しか品質保持できない。そして味も失われ早く腐敗が進む。それに比較して、有機栽培の野菜は5日間の品質保持が出来る。そして新鮮さと風味が失われない。ラオス農民は何百年にわたって、農業生態学に基づく土着の農民的知識を活用してきたのである。そして持続可能な農法の地域に根差した知識に信頼をおいて、そうしてやってきたのである。このタイプの農法はいかなる化学肥料も殺虫剤の使用とも無縁のものである。

このプロジェクトは有機農業の進展によって、生活水準の向上、消費者の健康、持続的な資源の活用、経済成長に貢献している。

これは、農業部と国際協カスイス協会によって進められたものである。

Organic farmers watch their business bloom

PHONSAVANH VONGSAY

An organic farming project plans to involve 150 local farming families by the end of this year, and expects to produce enough vegetables to sell in its own shop.

The project currently has 46 organic farming families working for it, in five villages in Sikhottabong, Xaysettha, Xaythany and Hadxaifong districts in Vientiane, a huge increase from the three families it began with a few years ago.

"We may have enough vegetables to sell all year round if we can get more families to supply us," said the Co-Manager of the Promotion of Organic Farming and Marketing Project, Mr Phouvong Chittanavanh.

Each family grows crops on between 3,200 to 9,600 square metres of land, without the use of artificial fertilisers and pesticides. They grow lettuce, cabbage, onions, garlic, chilli, carrots, melons, beans, tomatoes and local fruits.

The project plans to open a vegetable shop to promote its organic products, as well as provide a permanent outlet for the farmers.

"We have a shop at Thongkhankham market in Chanthabouly district, but it doesn't have a consistent supply of vegetables," Mr Phouvong said.

The shop opens every day and the organic vegetables sell well, but it does not have a steady supply. For example, the shop may have plenty of lettuces and cabbages, but only a few carrots and beans. And sometimes it has large amounts of tomatoes, onions and garlic, but only a few chillies and melons.

"When we can provide a consistent supply of all forms of produce, we will put up a new advertisement in front of the shop," said a shop assistant, Ms Duangta.

The project teaches organic farming techniques and encourages farmers to grow crops continually so that harvests can be collected every month. It also encourages them to expand their vegetable plots so they get different vegetables every month of the year.

"We are now evaluating the output from our farmers and we will continue with our plans until there is a consistent supply of a wide range of crops for sale," Mr Phouvong said. "Organic farming is not for lazy

farmers."

Once a stable supply has been achieved, vegetable packing will be organised in each village, and the produce will be labelled as organic.

"We also aim to sell our produce to supermarkets and mini-marts," Mr Phouvong said.

He wants to help farmers sell their crops directly to retailers and hopes to cut out middlemen, thereby lowering prices.

Organic agriculture refers to a production system that manages the ecological interactions within an ecosystem, and grows crops without the use of chemical fertilisers or pesticides in order to promote and enhance soil fertility, plant health and prevent large-scale pest and disease outbreaks.

Organic farmers seek to eliminate the use of chemical fertilisers and pesticides because of the negative



Ms Pany, uses clams to make a natural pesticide.

impacts these chemicals have on the environment, human health, and the long-term viability and productivity of farmland.

One farmer in Nontae village in Xaythany district, Mr Bounnhong Phomdoktan, said he started organic farming three years ago. Before that, he farmed with the use of chemical fertilisers and pesticides, but he often felt tightness in his chest and coughed a lot, and was unable to taste the food he ate.

"My doctor told me I had contracted an allergy from the

chemicals and that I had been working with them for too long, since 1974," Mr Bounnhong said.

Today he makes his own natural fertiliser and insecticide at home, recycling the by-products from his farm such as fodder, manure, compost, rice husks and straw.

He no longer spends money on chemicals, and the prices of his organic produce are similar to the chemically grown ones, for example, 20,000 to 40,000 kip for 12 kg of lettuce.

"Some traders don't believe that my crops are organic because they look as nice as those chemically produced," he said. He plants a variety of vegetables including tomatoes, beans, melons and chillies.

Another market gardener, Ms Noy, said the farmers were now using their own seeds, whereas in the past they bought imported seeds.

Ms Noy also plants different types of vegetables at her farm but her favourite crop is red lettuce.

Farmers take about a week to make their fertilisers and insecticides and the home-made insecticides have to be sprayed within three months, otherwise they will lose their effectiveness.

The organically grown plants also take longer to grow large enough for harvesting. For example, it takes only 20 days for chemically grown morning glory to reach maturity, but that grown organically takes a week longer.

"They are of a completely different quality," Mr Phouvong said.

The chemically grown vegetables keep for only one or two days and then lose their taste and rot fast, compared to about five days of shelf life for organically grown vegetables, which remain fresh and flavourful.

Lao farmers have used their indigenous knowledge of agroecology for hundreds of years, and continue to do so, relying on their local knowledge of sustainable farming methods. This type of farming does not use any chemical fertilisers or pesticides.

The project contributes to improved living conditions, the good health of consumers, the sustainable use of natural resources, and economic growth through the promotion of organic agriculture.

It is implemented by the Department of Agriculture and Helvetas, the Swiss Association for International Cooperation.